

九州大学
応用生理人類学
研究センター年報

|| 2014 » 2015 年度 ||

Physiological Anthropology Research Center
Kyushu University
Annual Report 2014-2015

2014－2015年度

応用生理人類学研究センター年報

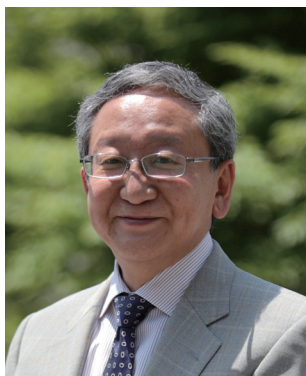
III 応用生理人類学研究センター

PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGY RESEARCH CENTER



目次

1. センター長挨拶	1
2. センター紹介	2
センター設立趣旨	2
部門紹介	4
・環境適応研究部門	4
・アクティブライフ部門	6
・ヒューマニティ部門	8
・レジリエンスデザイン部門	10
3. 活動報告	12
センター関連イベント	12
・キックオフシンポジウム	12
・第1回、第2回、第3回講演会	14
・日本生理人類学会若手奨励研究発表会特別講演	16
・国際学生交流コロキウム	18
部門活動報告	20
・環境適応研究部門	20
・アクティブライフ部門	22
・ヒューマニティ部門	24
・レジリエンスデザイン部門	26
4. 研究業績一覧	28
5. 外部研究資金一覧	40



センター長兼レジリエンスデザイン部門長
綿貫茂喜

応用生理人類学研究センター長挨拶

技術・情報の飛躍的革新は生活を一見便利で快適にしていますが、一方でヒトが生き残りをかけて生物学的に適応してきた環境との乖離はますます大きくなり、その歪みはすでに人の健康リスク等の様々な問題を引き起こしています。

これらの問題を解決するため、ヒトの生物学的適応に関する基礎研究が九州芸術工科大学設置以来45年にわたり生理人類学分野にて行われてきました。この基礎研究を土台とし、現代社会が抱える喫緊の諸問題を解決するため、応用研究に特化した応用生理人類学研究センターを2014年の8月1日に設置しました。当センターは、環境適応研究、アクティブライフ、ヒューマニティ、レジリエンスデザインの4部門で構成されています。国内はもとより、海外の産官学との共同研究も推進していく予定ですので、ご関心を持たれた方はセンター事務局へお知らせ下さるようお願い申し上げます。

2. センター紹介

設立趣旨

設立背景

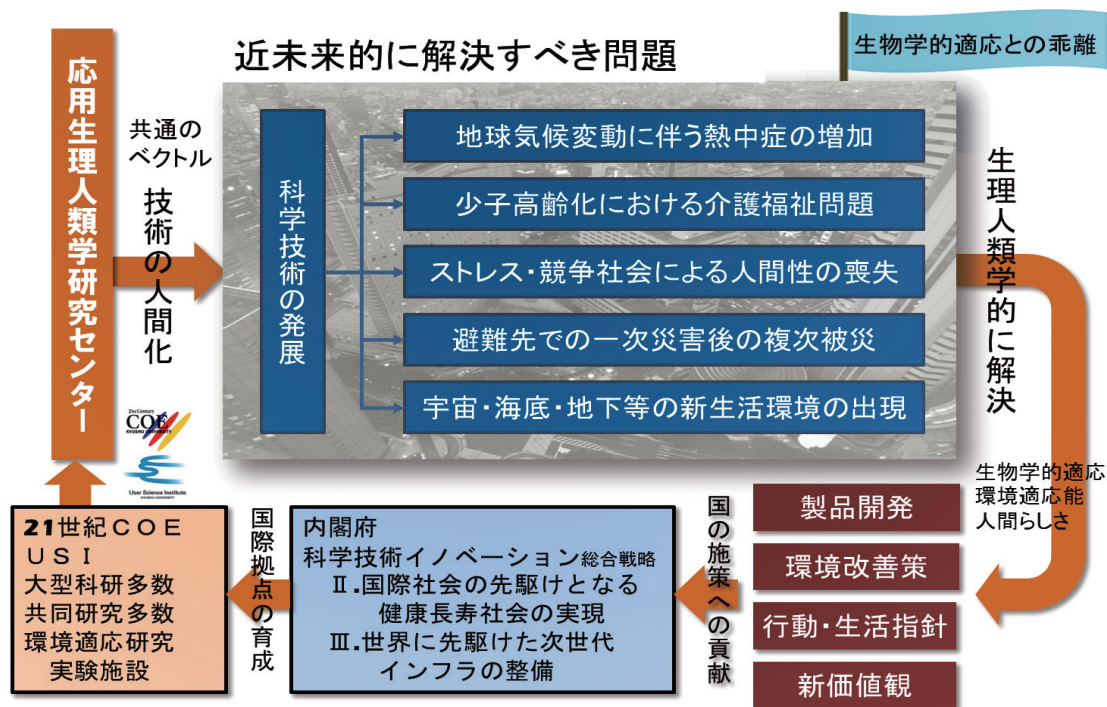
技術・情報の飛躍的革新は生活を一見便利で快適にしている。しかし一方で、ヒトが生き残りをかけて生物学的に適応してきた環境との乖離はますます大きくなり、その歪みはすでに人の健康リスク等の問題を引き起こしている。これら問題を解決するために必要となるヒトの生物学的適応に関する基礎研究は、九州芸術工科大学設置以来45年にわたり生理人類学分野にて行われてきた。この基礎研究を土台とし、現代社会が抱える喫緊の諸問題を解決するためには、応用研究に特化した研究組織が必要である。

今日までに得られた生理人類学的知見に照らし、現代社会及び近未来社会が抱える諸課題を検討したところ、以下のような課題が抽出された。

- ・地球気候変動に伴う熱中症（寒冷を含む体温調節機能の破綻）の増加及び社会不安
- ・人工照明による睡眠不足（概日リズム不整合）等の健康リスクの増加
- ・少子高齢化及び長寿社会による介護・福祉問題

- ・ストレス・競争社会による人間性の喪失
- ・情報化社会の進展に伴いインターネット依存などからくる社会問題
- ・一次災害後の避難先における複次被災
- ・科学技術の発展に伴う宇宙、海底、大地下など新たな生活環境の出現

これらの問題点の多くは、内閣府作成の「科学技術イノベーション総合戦略第2章科学技術イノベーションが取り組むべき課題（Ⅱ．国際社会の先駆けとなる健康長寿社会の実現、Ⅲ．世界に先駆けた次世代インフラの整備）」に含まれており、早急に解決法を提案することが社会的に求められている。しかしながら、これらの大きな問題を解決するためには個人研究では限界があり、複数の専門家から構成される大型の研究組織が必要である。さらにその複合する分野の研究組織が、共通のベクトルの下に、生活環境との適合性を人類学的観点、すなわち環境適応能の視点から評価し、人の行動指針や環境改善策を提案することが必要である。



応用生理人類学研究センター設置の背景と必要性

基礎学問の生活への応用を目指して

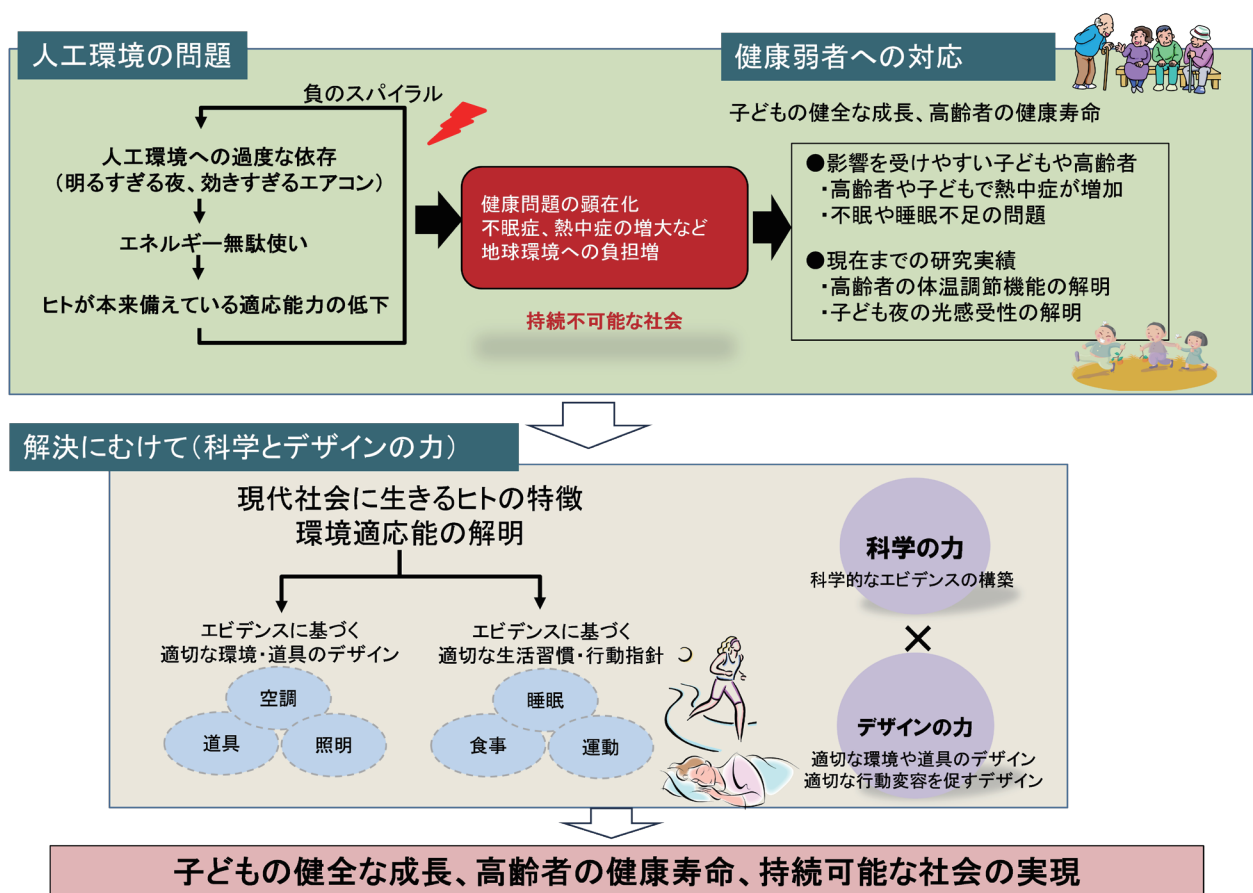
当センターの名前にある「生理人類学」は、生物学・人類学を基盤とした基礎科学の学問である。一般的に「人類学」というと「過去の人類の特徴や生活を発掘された人骨に基づいて予想すること」を思い浮かべられるだろうが、「生理人類学」は現代を生きるヒトを対象としている。もちろん生理人類学も人類学の一領域であるので、過去の人類の歴史、例えば人類の進化、生活環境の変容、科学技術の発展の歴史を無視する事はできない。「生理人類学」はこれら人類の歴史を踏まえたうえで、現代人の生理学的・身体的特徴やその特徴と生活環境および生活習慣との関連性から現代人の生理的機能やストレス状態を多面的に評価し、そしてより良い人類の未来を創造するための基礎的学問であるといえる。

本センターは基礎的な学問である生理人類学を現代人の生活環境や生活習慣に対して応用し、さらには未来の我々の子孫にとってよりよい環境・習慣を提案する使命を持って設立された。

本センター設立に当たって、人間をとりまくさまざまな要因のうち「適応」、「生活」、「感性」、「レジリエンス」という4つのキーワードを軸を設定して、それぞれ「環境適応研究」、「アクティブライフ」、「ヒューマニティ」、「レジリエンスデザイン」の4つの部門を設立し、現代人そして未来の人類にとってよりよい環境・生活を提案する事を目指している。

各家庭におけるエアコンや照明器具などは生活を豊かにそして快適にするものである一方、冷房病、生体リズムの乱れなど、これらの環境に起因するさまざまな健康問題が、さらには人工環境によるヒトの環境適応能の低下から不眠症や熱中症の増加などが顕在化している。これらの影響は、健康弱者と呼ばれる高齢者や子どもなどでは深刻な問題となっている。

本センターは、これらの問題を解決するために現代社会に生きるヒトの特徴や環境適応能を解明し、エビデンスに基づいた適切な環境や道具、生活習慣や行動指針を提案し、子どもの健全な成長、高齢者の健康寿命の延長、そして持続可能な社会の実現を目指している。



応用生理人類学研究センターが目指す内容

2. センター紹介（部門紹介）

環境適応研究部門

部門概要

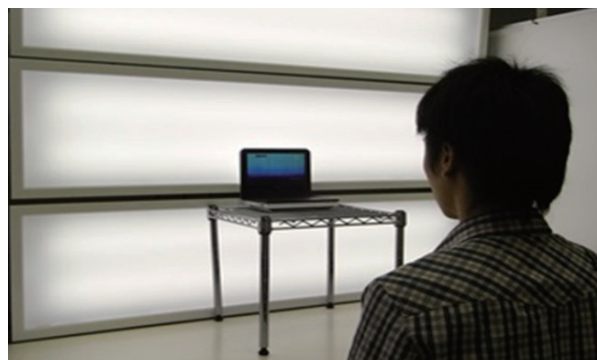
これまでヒトは自ら生活する環境を創造・人工化してきており、現代人はそのほとんどの時間を人工環境下にて過ごすようになった。このような環境の人工化はヒトに快適で豊かな生活環境を提供してきた。例えば、空調設備の普及により、夏は涼しく、冬は暖かい快適な室内環境で過ごすことができる。また、人工照明を使用することで夜間でも明るく視認性が確保された環境にて活動することができる。このように、人類が作り上げてきた人工環境は、我々に快適で豊かな生活空間を提供してきたものの、健康リスクを高めることや、ヒトが本来有する生理的な適応能力を失う可能性を高めるなど負の影響も有している。例えば、空調機器の使用は冷房病のリスクを高め、室内と室外の急激な温度差はヒートショックを引き起す。また、過度な空調機器への依存は不適切な発汗など体温調節機能を低下させる可能性もある。さらに、夜間も明るい人工照明は、概日リズム位相の後退やメラトニン分泌の抑制を引き起こし、不眠症や発癌等の健康リスクを高めることが指摘されている。

本部門は様々な環境因子に対する生理学的特性を把握し、ヒトの生物学的適応能を明らかにしつつ、真に快適で持続可能な生活環境デザインの構築に取り組んでいる。これらの研究には、本研究センターが有する温熱、湿度、気流、光、気圧などの様々な物理環境を人工的に造成できる世界有数の環境適応研究実験施設を使用して行っている。現在、主に取り組んでいる研究テーマの一例は以下のとおりである。

○ヒトの概日リズム系を考慮した次世代照明特性の解明。光による概日リズム系への作用を理解し、ヒトに適した照明特性の解明を行っている。特に、現在、日本政府が薦める省エネ化に対応した次世代照明（例えばLED）特性について取り組んでいる。

○朝型や夜型のような行動的嗜好性が、朝や夜の光に対する反応にどのような特徴があるのかを実験的に調べる取り組みをしている。このような研究によって、生活リズムが異なる人々に対するオフィスでの作業性

や快適性の向上、あるいは夜の睡眠の質の向上に貢献できる照明条件を提案できると考えている。



照明光による生体作用に関する実験の様子

○現代人の温熱環境に対する環境適応能の評価とその適応能に基づいた本当の意味でのヒトに適した生活環境の創出を目標に、現代生活者の生活習慣および生活環境によってヒトの適応能がどのように影響を受けるのか、適応能を向上しうる生活環境・生活習慣の解明について研究を行っている。特に近年問題となっている熱波や寒波など地球規模の気候変動に対する耐性をいかにして向上しうるかについて取り組んでいる。

○高齢者の免疫機能向上のための環境創出について取り組んでいる。高齢者施設における感染症の流行に対抗するために、温熱環境刺激を利用して、高齢者の負担の増大なしに免疫機能を向上しうる環境条件について検討を行っている。



入浴による生体負担に関する実験の様子

構成員紹介



安河内 朗（芸術工学研究院デザイン人間科学部門生理人類学講座、教授）

経歴：九州芸術工科大学大学院芸術工学研究科生活環境専攻修士課程修了（1979年3月）、博士（理学）（京都大学、1986年）。九州芸術工科大学芸術工学部助手（1980年3月）、労働省産業医学総合研究所研究官（1982年4月）、同主任研究官（1988年4月）、九州芸術工科大学芸術工学部助教授（1990年6月）、同教授（1999年3月）、統合により九州大学大学院芸術工学研究院に所属名称が変更（2003年10月）を経て現在に至る。日本生理人類学会会員。

専門：生理人類学。ヒトの環境適応能、生理的多型性を研究。



前田 享史（芸術工学研究院デザイン人間科学部門生理人類学講座、教授）

経歴：九州芸術工科大学博士後期課程修了（1998年3月）、博士（芸術工学）。博士（医学）（福島県立医科大学、2005年9月）。福島県立医科大学医学部（衛生学）助手（2002年3月）・講師（2006年9月）、北海道大学大学院工学研究院（環境人間工学）准教授（2015年3月）を経て2015年4月より現職。日本人間工学会、日本体力医学会、日本生気象学会等会員。人間生活環境系学会評議員、日本生理人類学会理事。

専門：生理人類学、環境人間工学、温熱生理学。ヒトの環境適応能、ヒトの生理的特徴や生産性からみた人工環境について研究。



小崎 智照（芸術工学研究院デザイン人間科学部門生理人類学講座、助教）

経歴：九州芸術工科大学博士後期課程修了（2004年3月）、博士（芸術工学）。九州大学大学院芸術工学研究院学術研究員（2010年3月）、独立行政法人労働安全衛生総合研究所研究員（2011年3月）、九州大学大学院芸術工学研究院助教（現在に至る）。日本照明学会、人間生活環境系学会、日本生理心理学会等会員。日本人間工学会評議員、日本生理人類学会理事。

専門：生理人類学、人間工学。ヒトの生体に適した人工環境や脳機能の性差について研究。



瀬口 典子（比較社会文化研究院、准教授）協力研究員

経歴：米国ミシガン大学大学院、アナーバー校、人類学部博士課程修了（2000年4月）、Ph.D.（生物人類学）。ミシガン大学人類学博物館付属研究員（2000年2月～2009年5月）、ミシガン大学アナーバー校、人類学部講師（2002年）、米国モンタナ大学ミズーラ校人類学部助教授（2002年8月～2008年7月）、米国モンタナ大学ミズーラ校人類学部准教授（2008年4月テニュア取得、2008年8月～2012年6月）、九州大学大学院比較社会文化研究院准教授（2012年7月～現在に至る）。アメリカ自然人類学会会員、アメリカ人類学会会員、日本人類学会会員、文部科学省『大学が保管するアイヌ遺骨の返還に向けた手続きに関する検討会』委員。

専門：ヒトの多様性と進化、人類の拡散・移動の歴史、3次元バーチャルイメージ分析、生物学的人種概念の無効性、人種差別、性・ジェンダー差別問題。

2. センター紹介（部門紹介）

アクティブライフ部門

部門概要

人類の平均寿命は急速に伸びている。WHO の報告によると、加盟国全体の平均寿命は 1990 年では 64 歳であったが、23 年後の 2013 年には 71 歳と 7 歳も延伸している。また平均寿命（男女）が 80 歳を超える国は 1990 年ではゼロであったが、2013 年には 31 の国にも及び、多くの国が長寿国となっている。このような平均寿命の延長は人類史上かつてない年齢人口構成を招き、多くの新しい課題を生み出している。

例えば、延伸した高齢期（生物で言えば後生殖期）をどう生きるか、要支援・介護者の増加や老老介護にどう対応すべきかなど、個人としても社会としても考えるべき課題が山積みになっている。その対策として高齢者が活躍する場の拡大、健康寿命の延伸、テクノロジーの福祉・介護への導入（介護ロボット、アシスト機器など）などが進められている。

本部門では、生理人類学的なアプローチから寿命の延伸や人口高齢化に起因する諸課題の解決に貢献する研究を推進する。基本的方針として、単に高齢者や介護の支援を考えるのではなく、それぞれの年齢層や障害の心身機能の特性を生理人類学的視点から理解し、人々をアクティブな生活へと導くための方策の提案を目指す。具体的には生活（衣食住）、労働、スポーツ、教育、介護などに関わる製品や人工環境などのデザイン、望ましい生活・労働スタイルなどの提案を進める。

尚、本部門は高齢者のみでなく、子どもや障害を有する人々なども対象とする。また、実社会（地域住民、介護施設、産業界、行政など）と密接な連携を図るとともにフィールド研究も積極的に進め、研究成果の社会実装に取り組む。さらに、国際的な研究連携も進め、アジアにおけるアクティブライフの研究拠点を目指す。

構成員による研究例

・聴覚障害とその支援に関する研究（担当：白石）

高齢者や聴覚障害者の音のバリアフリー、補聴器などの支援機器の研究を行っている。音のバリアフリー

は、福岡市、西鉄バスとの共同研究で、騒音の中でも聞こえるヒアリング・ループ付きのバスを走行させている。補聴器は、日本語に合わせた音響特性の研究や音声聴取と環境音との関係を調べて、より聞き取りやすいフィッティング方法を研究している。

・高齢者のテクノアダプタビリティの研究(担当:村木)

高齢社会の諸問題の解決にアシスト機器や介護ロボットなどのテクノロジーの導入が進んでいる。しかし、人間とテクノロジーのインタラクションの問題から様々な課題が生じることが予想される。テクノロジーに対する適応能（アダプタビリティ）の面から、高齢者の生活にとって真に望ましいテクノロジーのあり方を考える。

・高齢者の生活とケア場面の最適化の研究(担当:能登)

高齢化による人口動態の変化から様々な資源の不足が問題視されており、ケアを提供する人とケアを受ける人の双方の健康維持が必須課題となる。アクティブな生活や看護・介護現場の安全・快適性を支える活動能力やケア力、環境に影響を及ぼす因子を心身機能の特性や行動・生理反応から探求し、相乗効果による望ましい生活を提案する。

関連研究施設

・居住空間実験住宅（大橋キャンパス）

2階建て回り廊下付の実験住宅で、入浴、排泄、炊事、歩行、介助動作など住宅内における日常動作を3次元で計測・解析できる。また、入浴、睡眠、休息、食事、団欒、家事、学習、機器操作などの実生活時の行動・生理反応測定ができる。（床面積 160m²）



居住空間実験住宅

（左：建物外観、右：歩行動作解析の様子）

構成員紹介



白石 君男（芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門音響デザイン学講座、教授）

経歴：福岡大学工学部電子工学科卒（1975年3月）。福岡大学医学部耳鼻咽喉科学教室教育技術職員（1975年4月）、福岡大学医学部助手（1985年4月）、九州芸術工科大学音響設計学科助教授（2001年4月）、九州大学大学院芸術工学研究院音響部門助教授（2003年10月）。九州大学大学院芸術工学研究院教授（2005年9月）。博士（医学）、言語聴覚士。日本聴覚医学会、日本音声言語医学会、日本音響学会等会員。日本音響学会音バリアフリー調査研究委員会委員長。専門：聴覚医学（オーディオロジー）。高齢者や聴覚障害者の音のバリアフリー、聴性誘発反応、耳鳴を研究。



村木 里志（芸術工学研究院デザイン人間科学部門生理人類学講座、教授）

経歴：広島大学大学院生物圏科学研究科博士課程後期修了（1997年3月）、博士（学術）。長崎県立女子短期大学体育科講師（1997年4月）、県立長崎シーボルト大学看護栄養学部栄養健康学科講師（1999年4月）、九州芸術工科大学芸術工学部工業設計学科助教授（2003年4月）、九州大学大学院芸術工学研究院人間生活システム部門助教授（2003年10月）。認定人間工学専門家（日本人間工学会）。日本生理人類学会、日本人間工学会等会員。日本生理人類学会誌編集委員長。専門：福祉人間工学。高齢者や障がい者の動作特性に基づいた用具および生活環境、健康支援を研究。



大草 孝介（芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門情報音響システム学講座、助教）

経歴：中央大学大学院理工学研究科博士課程後期修了（2012年3月）、博士（工学）。中央大学理工学部助教（至2014年3月）、九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門助教（現在に至る）。日本統計学会、日本計算機統計学会、電子情報通信学会会員。日本計算機統計学会理事、同広報委員、同和文誌編集委員、統計関連学会連合事業委員会委員。専門：計算機統計学、センシング。多次元時系列データの統計的クラス分類手法に関する研究を基礎に、センシングデータに基づく独居高齢者の見守りシステムや、個人認証システムの開発に従事。



能登 裕子（医学研究院保健学部統合基礎看護学講座、講師）協力研究員

経歴：九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻後期博士課程修了（2011年3月）、博士（芸術工学）。純真学園大学保健医療学部看護学科助教（2011年4月）、九州大学大学院医学研究院保健学部看護学分野講師（2014年4月）。看護師、保健師。日本人間工学会、人類動態学会、看護人間工学会、日本看護技術学会等会員。専門：看護人間工学。高齢者の介護予防と看護・介護に関わる人々の負担の軽減に向けて、看護・介護現場や地域の生活場面における技術や用具および環境を研究。

2. センター紹介（部門紹介）

ヒューマニティ部門

部門概要

人間性の探究

本部門は「人間性＝ヒューマニティ」についての研究を行っている。ヒトは様々な物理的または社会的な環境の中で身体的にまたは精神的にうまく適応しながら生きていく能力を備えている。特に精神的な適応に関しては、共感、美、愛、情熱、希望、協力、感動、幸福などのヒトの人間性が大きく関係している。

しかしながら、現代社会は様々なストレスであふれている。成果主義による競争の激化、長時間労働による過労や睡眠不足、ワーク＆ライフバランスの崩壊、対人関係の希薄化、SNSなどのコミュニケーション手段の変化、引きこもり、格差社会、民族間の対立など様々である。

ヒューマニティ部門では、ヒトが人間性を獲得してきた進化適応的な背景や、人間性の発達メカニズムを意識しながら、現代社会が抱える様々なストレス環境が人間性に与える影響について研究している。様々な状況を想定し、行動・生理・心理的な測定方法を用いて客観的に人間を探究している。



感性について

本部門では、人間性と並行して、感性をキーワードにした研究も行っている。感性の定義は多義的で、その定義も多様である。外界の感覚情報の知覚だけではなく、それによって引き起こされる情動や感情までも内包している。また、直観的な価値判断、無自覚な心の働きなどとも関連している。生理人類学の立場からは、ヒトが“うまく生きる”ための進化適応上の“こころのはたらき”と広義に捉えることもできる。

ヒトの嗜好性、意思決定、価値判断に知性は欠かさないが、感性とよばれる心の働きも欠かさない。知性偏重の時代から、感性の役割が見直され、両者のバランスが求められる時代となっている。

基礎から応用へ

応用生理人類学研究センターでは、人間性や感性の基礎的な探究と同時に、その成果を社会に還元することも重要視している。時代は大量生産・大量消費に代表される物質的の時代から、質的な時代に代わっている。モノづくりにおいては感性に訴える商品や企画が必要な時代であり、教育や医療・福祉の現場においても感性が必要とされる時代となっている。それらのニーズに応えるため、感性を切り口に、企業や地域と連携した研究も積極的に実施している。

構成員紹介



樋口 重和（芸術工学研究院デザイン人間科学部門生理人類学講座、教授）

経歴：九州芸術工科大学工業設計学科卒業（1992年3月）、同大学院芸術工学研究科博士課程修了（1997年3月）、博士（芸術工学）、秋田大学医学公衆衛生学講座助手（1997年4月）、労働安全衛生総合研究所研究員（2006年4月）、国立精神・神経医療研究センター室長（2007年7月）、九州大学大学院芸術工学研究院デザイン人間科学部門教授（2009年4月）。所属学会：日本生理人類学会（理事）、日本時間生物学会（評議員）、日本睡眠学会（評議員）、日本生理心理学会 専門：ヒトの脳のミラーニューロンシステムについて研究を行っている。光の概日リズム・睡眠に及ぼす影響についての研究にも従事している。



キム ヨンキュ（芸術工学研究院デザイン人間科学部門生理人類学講座、准教授）

経歴：九州芸術工科大学博士後期課程修了（2006年3月）、博士（芸術工学）。九州大学ユーザーサイエンス機構研究員（至2009年3月）、九州大学大学院芸術工学研究院デザイン人間科学部門准教授（現在に至る）。日本生理人類学会、日本生理心理学会、韓国感性科学会会員。日本生理人類学会評議員、同和文誌編集委員。専門：生理人類学、感性科学。情動誘発時における生理反応に関する研究を基礎に、母親や父親の情動調節反応や、美的判断の評価指標開発等に従事。



松隈 浩之（芸術工学研究院コンテンツクリエイティブデザイン部門コンテンツデザイン講座、准教授）

経歴：九州芸術工科大学画像設計学科卒業（1994年3月）、同大学院情報伝達専攻修了（1996年3月）修士（芸術工学）。凸版印刷株式会社グラフィックアートラボラトリー GALA 勤務（1997年4月）。九州芸術工科大学講師（2003年9月）、九州大学大学院芸術工学研究院准教授（現在に至る）。日本デジタルゲーム学会、日本デザイン学会、情報処理学会、アジアデジタルアートアンドデザイン学会会員。日本デジタルゲーム学会理事。専門：コンテンツデザイン、シリアスゲーム。病院や福祉施設と連携し、主に高齢者のためのリハビリ・ヘルスケアを目的としたシリアスゲームの研究開発に従事。



平松 千尋（芸術工学研究院デザイン人間科学部門生理人類学講座、助教）

経歴：筑波大学生物学類卒業（2001年3月）、東京大学新領域創成科学研究科博士課程修了（2006年3月）、博士（生命科学）。自然科学研究機構生理学研究所研究員（至2010年3月）、日本学術振興会特別研究員PD（京都大学文学研究科、至2013年3月）、を経て2013年9月より九州大学大学院芸術工学研究院助教（現在に至る）。日本霊長類学会、日本神経科学学会、日本基礎心理学会、日本進化学会会員。専門：生命科学。動物の色覚の進化やヒトの視覚機能について研究を行ってきた。最近は遺伝子、文化、環境等の相互作用が織りなすであろう感性の個人差に着目している。



橋彌 和秀（人間環境学研究院人間科学部門発達心理学第一講座、准教授）協力研究員

経歴：京都大学教育学部卒業（1992年3月）、京都大学大学院理学研究科博士課程修了（1997年3月）、博士（理学）。学振特別研究員DC1（京都大学霊長類研究所）、同PD（東京大学医学系研究科）を経て京都大学大学院教育研究科教育認知心理学講座助手、九州大学大学院人間環境学研究院助教授、准教授（現在に至る）。所属学会：日本心理学会、日本発達心理学会、日本人間行動進化学会（常務理事）、日本赤ちゃん学会（理事）。専門：コミュニケーションおよびその基盤となる知覚・認知バイアスの起源に注目し、その発達と進化に関する実験研究を行っている。特に最近は、共感性の成立基盤に関する研究に従事している。

レジリエンスデザイン部門

部門概要

レジリエンスは、「変化に直面した際の継続性と回復」と説明されている。またレジリエンスエンジニアリングという語はオハイオ州立大学のデビッド・ウッズ教授が2000年にNASAで行った講演「リスクが生じるミッションの管理」で、はじめて使われたと言われている。その後2004年スウェーデンで行われたヒューマンファクター・エルゴノミクス学会でレジリエンスエンジニアリングが研究され始め、以降様々な分野で利用されている概念である。

日本では、2013年2月の内閣施政方針演説の中で「強靱化」という言葉に翻訳され使われた。本来は「精神的回復力」、「抵抗力」、「復元力」、「耐久力」を表す心理学的、物理学的用語である。ストレスも元々は物理学用語で「外力による歪み」を表すが、このストレスに対して「歪みを跳ね返す力」がレジリエンスである。

その跳ね返し方も、外力がかかる前の予防的準備段階、予測される外力への警戒段階、緊急時のマイナスをできるかぎり減らす段階、以前よりもより良い場所もどす回復段階など、外力の状況に対応し適切な研究が必要になる。

そのためには「レジリエンスのフィードバックのメカニズム」とされているものが重要である。それはリソースを多様化させ単純なコンテキストにさせないことが重要であるとされている。これは「レジリエンスのための脱集中化・分離化」と言われ、さらには「信頼性の高いフィードバックループ」・「ダイナミックな再構築」・「固有の対抗メカニズム」・「分離可能性・多様性」・「モジュール構造」・「単純化」・「高密度化」などがレジリエンスを構築する道具である。最近ではこれだけでなく、さまざま観点や問題発見手法・解決手法が必要となってきた。

このような研究対象である「レジリエンスデザイン」が大学の研究機関の部門名称につけられていることは全国的にも珍しく貴重な例であり、「生理反応による感性科学研究」を基盤として、芸術工学のアプローチから統合的に研究している。「感性科学・生理人類学」

の研究方法と「デザイン学」や「機能工学」の方法が協力し複合的に問題に迫ることにより、言語化されていない様々な非日常下での問題の解決を目指している。

また、「レジリエンスデザイン」に対応するためこのような従来の芸術工学のアプローチだけでなく、学内外の「集団における人間の心理と行動」や「救急医学・応用健康科学・医療社会学」「社会心理学」分野とも協力し、実践的な研究を行っている。「レジリエンスデザイン」という名称の価値だけでなく「救急医学」「感性科学」「生理人類学」「機能工学」「デザイン学」「医療社会学」「社会心理学」という極めて広範囲かつ密接な研究体制により、いま目の前に起きている問題、必ず起こりえる問題に強靱で柔軟に対応していく体制となっている。

さらには、センターの環境適応部門とは環境デザイン・環境生理学的な観点から、アクティブライフ部門とは人間工学や働態学的な観点から、ヒューマニティー部門とは印象形成や脳科学的な観点から協同し、よりよい研究体制や方法を創造していく。

追記

2016年4月14日熊本県と大分県で大規模な地震が発生しました。亡くなられた方々に謹んでお悔やみ申し上げますとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。また復興に尽力されている皆様には安全に留意されご活躍されることもお祈りいたします。

被災者の皆様の健康やその改善、避難所環境の改善、そしてこれからのまだつづく仮設住宅での生活や復興のための日々の暮らしにおいて、応用生理人類学やレジリエンスデザインがすべきことはまだ多くあります。必ず起こりえる次の災害に向けて、レジリエンスデザイン研究は重要であり、実践的な研究成果を積み重ねていきたいと考えています。

構成員紹介



綿貫 茂喜

(芸術工学研究院デザイン人間科学部門生理人類学講座、教授)

九州芸術工科大学芸術工学部工業設計学科卒業、九州芸術

工科大学芸術工学研究科生活環境学修了。学術博士(論文)、芸術工学修士(課程)。九州芸術工科大学芸術工学部助手(1982-1984)、大阪市立大学生活科学部助手(1984-1990)、同講師(1990-1994)、同助教授(1994-1995)、九州芸術工科大学助教授(1995-2003)を経て、九州大学大学院芸術工学研究院教授。生理人類学、感性科学を研究。1995年、日本生理人類学会論文賞受賞。



尾方 義人

(デザインストラテジー部門准教授)

九州芸術工科大学芸術工学部工業設計学科卒業。博士(工学)(大阪大学)。株式会社西武百貨店、川崎和男デザイン

室(有限会社オーザックデザイン)、岡山県立大学、大阪大学大学院工学研究科兼医学系研究科兼コミュニケーションデザイン・センターを経て、2009年より現職。一貫して、具体的な商品デザインの実践、デザイン方法・デザイン教育の研究、企業のデザイン支援を行う。



藤 智亮

(芸術工学研究院デザインストラテジー部門ソーシャル・システムデザイン講座、准教授)

経歴：九州芸術工科大学芸術工学部工業設計学科卒業

(1992年3月)、博士(芸術工学)。株式会社日立製作所(至1995年3月)、九州芸術工科大学芸術工学部助手(至2003年9月)、九州大学大学院芸術工学研究院助手(至2007年3月)、同助教(至2015年3月)、同准教授(現在に至る)。日本機械学会、日本設計工学会、日本生理人類学会、日本図学会会員。

専門：機能工学、設計工学。育児支援のための乳児用

揺動型ベビーベッドの開発、認知機能の向上・維持のためのコンテンツ開発、災害時のための人力運搬具の開発に従事。



縄田 健悟

(九州大学 持続可能な社会のための決断科学センター、講師) 協力研究員

九州大学教育学部卒業、九州大学大学院人間環境学研究院修了、博士(心理学)。日本

学術振興会特別研究員(DC2,PD)、京都文教大学総合社会学部講師等を経て、九州大学持続可能な社会のための決断科学センター講師。専門は社会心理学で、特に集団における人間の心理と行動を対象に研究を進めている。現在の主要な研究テーマは(1)暴力性と反社会性を生み出す集団要因の実証的解明と(2)企業組織を対象にした高成果を生み出すチームプロセスの検討である。日本心理学会会員、日本社会心理学会会員など。



山田 クリス孝介

(佐賀大学医学部、助教) 協力研究員

早稲田大学人間科学部スポーツ科学科卒業。日本大学大学院理工学研究科医療・福祉工学専攻修了、博士(工

学)。早稲田大学先端科学・健康医療融合研究機構助手(2008-2009)、独立行政法人産業技術総合研究所特別研究員(2009-2011)を経て、現在、佐賀大学医学部附属病院高度救命救急センター助教。研究者としてのバックグラウンドは心理学(健康心理学)で、学位(工学)を取得後、一般企業での研修、経済産業省所管の研究所の工学系センターでの実務を経験し、その後、救急医療の現場に所属。行動医学、生理人類学、健康心理学、救急医学などの分野で心理社会的ストレスに関する研究に従事。生理人類学会評議員、日本行動医学会会員、日本健康心理学会会員、日本救急医学会会員など。

3. 活動報告（センター主催）

キックオフシンポジウム

「人間の生物学的資質に基づいた新たなテクノロジー社会のデザイン」

2014 年 11 月 21 日（金）、TKP ガーデンシティ天神

開催趣旨

応用生理人類学センターの設立を記念し、「人間の生物学的資質に基づいた新たなテクノロジー社会のデザイン」と題して、キックオフシンポジウムを開催した。

福岡・天神の地に、関連する各センター、学会関係者、学生などおよそ百名が集い、生理人類学と関連する諸分野がどのように協力し、人類が直面している地球規模の問題に対処し、人間生活を豊かにすることができるかについての意見交換の場となった。

プログラム

13:30 ～ 13:40 センター長挨拶

13:40 ～ 14:30 基調講演

14:40 ～ 15:25 センターの紹介

- ・環境適応研究部門
- ・アクティブライフ部門
- ・ヒューマニティ部門
- ・レジリエンスデザイン部門

15:45 ～ 16:30 関連研究センターの紹介

- ・味覚・嗅覚センサ研究開発センター
- ・感性融合デザインセンター
- ・応用知覚科学研究センター

16:30 ～ 17:00 総合討論

17:00 ～ 17:10 閉会

共催

九州大学応用知覚科学研究センター

九州大学味覚・嗅覚センサ研究開発センター

九州大学感性融合デザインセンター

後援

日本生理人類学会

はじめに、綿貫茂喜センター長より設立趣旨および今後の活動方針についての挨拶をいただいた。その後、勝浦哲夫日本生理人類学会会長の基調講演に続き、センターの各部門の紹介、関連研究センターの紹介、総合討論を行った。

基調講演

「生理人類学とは - 現代社会における生理人類学の役割 -」勝浦哲夫（千葉大学教授、日本生理人類学会会長）

人類学から派生した生理人類学が、時間軸、空間軸を俯瞰し、今生きているヒトの本質を研究する学問として成立し、現代文明の中で生理人類学的デザインが重要な役割を果たすであろうことをお話しいただいた。また、ご専門である照明の研究について紹介いただいた。最後に、「応用研究は十分な基礎研究があって初めて成り立つ」、「根のない草には花も咲かず、実もならない」という、生理人類学的研究の充実と応用研究に対する激励の言葉をいただいた。



基調講演の様子

センターの紹介

環境適応研究部門（安河内朗）

ヒトの身体は人類史の99.8%を占める狩猟採集生活に適応したものであり、現在の近代的環境への不適応が懸念されている。それに対して生理人類学的立場からできる研究例など、今後の活動方針が示された。

アクティブライフ部門（村木里志）

地球規模の高齢化社会が抱える諸課題の解決に向けて、テクノロジー社会と高齢者の望ましい関係、そして、社会全体にとって望ましい高齢期の生活（アクティブライフ）が提案された。

ヒューマニティ部門（樋口重和）

メンタルヘルスの低下など、人間性の喪失は現代社会の重大な問題となっている。それを解決するためには、人間らしさの根幹であるヒトの感性に着目し、ヒトの精神機能に関する研究成果を社会に還元していくことが重要であると提言された。

レジリエンスデザイン部門（綿貫茂喜）

レジリエンスとは、「極度の不利な状況に直面しても、正常な平衡状態を維持できる能力」（Bonanno, G, 2004）である。この概念は災害等から回復する際に特に重要であり、今後ますます必要とされる研究分野であることを示された。

関連研究センターの紹介

味覚・嗅覚センサ研究開発センター（センター長 都甲潔）

世界発の突出した独創科学技術である味覚・嗅覚センサは、センターの分野横断的な研究体制により成功し、さらに安全・安心かつ快適な社会へ向け、イノベーションを創成していくことをお話しいただいた。

感性融合デザインセンター（副センター長 矢向正人）

科学的論理性と芸術的感性を融合させ、新しい価値観の創造と学際的教育研究の推進を目的とするセンターの役割をお話しいただいた。

応用知覚科学研究センター（センター長 中島祥好）

脳と心の不即不離の関係を解明する知覚科学は、学際領域として確立してきており、他センターとも連携を重視しながら発展していくことをお話しいただいた。

総合討論

関連する諸分野がどのように連携を取りながら、相互に発展し、イノベーションの創出や社会への還元を行っていくことができるかについて議論された。また、センターとして取り組みを発展させる際の秘訣についてのアドバイスなど、センター関係者の集まりならではの討論となった。



集合写真

第1回、第2回、第3回講演会

「脳機能解析による生理人類学研究」

Jin-Hwan Sohn 先生 (Chungnam National University, South Korea)

Bae-Hwan Lee 先生 (Yonsei University, South Korea)

2015年1月27日（火）（第1回）、2月3日（火）（第2回）、九州大学大橋キャンパス

2015年2月5日（木）（第3回）、九州大学大橋サテライト

開催趣旨

当センターで進めている脳機能研究と関連性が深い内容を専門とされている、韓国忠南国立大学の Jin-Hun Sohn 先生と韓国 Yonsei 大学の Bae-Hwan Lee 先生を招き、3回にわたり講演会を開催した。

Sohn 先生は韓国で初めて fMRI を用いて情動について研究された生理心理学者である。最近はインターネット依存、アルコール依存症、性依存症など、ある環境や刺激に依存症を示すヒトの脳活動の特徴に着目されている。これらの依存症は近年日本においても社会的問題となっており、依存症者の特徴を知ることが、予防や対策を講じる上で重要である。そこで、第1回目は Sohn 先生により性依存症患者を対象とした研究を紹介していただいた。

第2回目は、同じく Sohn 先生に、生活環境への適応性の側面から、低周波騒音の測定及び評価方法について講演を依頼した。Sohn 先生は長年ストレス環境におけるヒトの適応性について研究されており、特に低周波騒音の生理的影響について多くの成果を挙げられている。低周波騒音は、現代の生活環境におけるストレス要因の一つと考えられ、重要な基礎研究である。現代人の移動手段として、車、鉄道、飛行機、船舶などが利用されている中、そこから発生する騒音、特に低周波騒音の生理作用に関する知見は健康な生活を送る上で重要である。本講演では低周波騒音の測定方法や生理的影響の評価方法について講演いただいた。

第3回目は、韓国における痛み研究の第一人者である Lee 先生に痛みの脳機能について講演いただいた。痛みを感じる脳機能を知り、痛みを感じる程度の個人差に影響する要因を特定することは、治療方法の選択や患者さんの心理・精神的ケアにおいて必要な知識である。また、現代社会の深刻な問題である、いじめ・虐待・孤立などからもたらされる社会的痛みに対して

も、痛みを感じる脳部位及びそのプロセスについての知見は重要であり、貴重な話題を提供していただいた。講演題目と講演内容は以下の通りである。

第1回講演題目

「Brain system underlying sexual compulsive behaviors」

内容

約30年前から性的覚醒時の脳活動に関する研究が活発に行われ、fMRI や PET などの脳イメージング技術の発展により、性的覚醒を惹起する刺激に反応する大脳皮質や皮質下領域が特定されてきた。しかし、性的情報の処理において、脳の各部位がどのように情報を伝達し、統合し処理するのかは不明であった。そこで、fMRI により性的覚醒刺激に反応する脳部位を特定し、さらに Dynamic Causal Modeling 法を用いて各脳部位の effective connectivity を検証した研究について解説いただいた。最新のデータも多く示され、当センターのヒューマニティ部門においても脳機能解析によりヒトの本質に迫る研究を行っているため、研究内容及び研究方法について重要な知見を得る良い機会となった。参加者からは多くの質問があり、議論が絶えなかった。

第2回講演題目

「The effects of low frequency noise」

内容

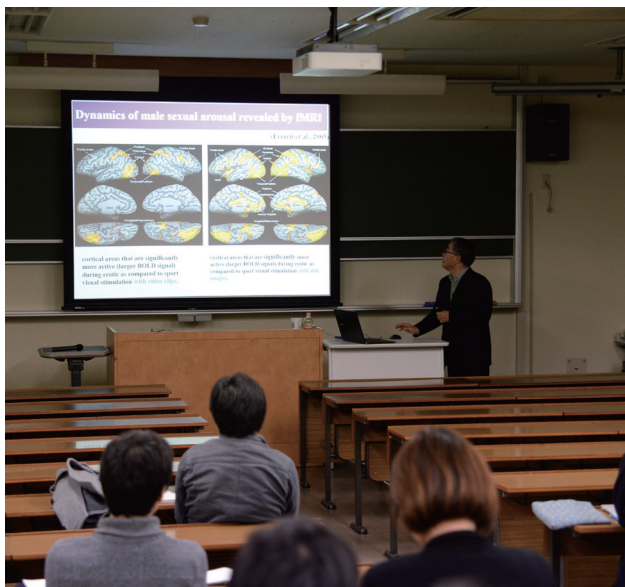
はじめに、様々な現代の交通手段（車、鉄道、飛行機、船舶などの乗り物）において発生する低周波騒音の実態調査の結果を紹介していただいた。続いて、乗り物の内部と外部での騒音の違いについて、音響の共鳴現象という側面から解説していただいた。また、低周波騒音が人体に及ぼす影響を評価するための心理評価尺度の開発過程について興味深いお話しがあった。その後、低周波騒音暴露による脳機能の反応および、皮膚温度、皮膚コンダクタンス反応、呼吸、脈波といった自律神経系の変化を紹介していただいた。低周波騒音への短時間暴露実験では、諸自律神経系の反応は低周波騒音により増加したが、fMRI 及び脳波研究では著しい変化が生じなかったという結果を示された。

第3回講演題目

「Information processing and modulation of pain in the brain」

内容

はじめに、痛みの定義、主な研究グループの紹介、痛みを感じる脳部位及びそのプロセスについて説明していただいた。その後、痛み研究の方法について、神経障害を有した動物の行動学的研究、特定の機械的刺激により痛みを生じさせた動物の行動学的研究、動物研究において大脳皮質の神経活動を計測する方法等について解説いただいた。そして、動物実験を例に、痛みを感じるプロセスについて最新の知見を紹介いただいた。その後、ヒトを対象にした痛み研究を紹介していただいた。痛みを感じる際の島皮質の機能や、認知的・情動的側面からの痛みのプロセスについて説明していただいた。



講義と議論の様子

日本生理人類学会若手奨励研究発表会特別講演 「共感というこころのシステムへのアプローチ」

橋彌 和秀先生（九州大学大学院人間環境学研究院）

2015 年 2 月 21 日（土）、九州大学大橋キャンパス

開催趣旨

昨今、サルおよびヒトにおけるミラーシステムの発見により、人間性の核ともいえる共感に関する研究が盛んに行われるようになってきた。ヒトの共感とそれを支える脳活動を明らかにすることは、当センター、ヒューマニティ部門の主要研究テーマの一つである。しかし、研究方法が未だ発展段階であること、共感の理論的構築が必要であることなど多くの課題があるテーマでもある。ヒューマニティ部門の協力研究員でもある、橋彌和秀先生は、子供の共感性の発達に着目し、精力的に研究されている。そこで、九州地区日本生理人類学会若手奨励研究発表会の特別講演にて、当センター共催イベントとして橋彌先生に講演を依頼した。

講演題目

「共感というこころのシステムへのアプローチ」

抄録

心理学や神経科学を含む人間行動諸科学においては、共感を、これまでそれを取り巻いていたドグマや既成概念からいったん解き放って自然科学の対象として扱うための理論的・方法論的な道具立てが、世紀を挟んだあたりから積み重ねられ、次第に整ってきた。この状況は、より具体的には、個体間のインタラクションを自然科学的に取り扱う理論と方法論（進化ゲーム理論）、こころという内的メカニズムの進化を議論する基盤の成立（社会的知性仮説）と、さまざまな研究手法の洗練に支えられている。理論とテクノロジーとがうまく咬み合って、その時代その時代でないといけない研究というのが、かならずある。共感とは、現代においてそのようなテーマのひとつと言ってよい。ここでの知見は、行動経済学やロボティクスから哲学に

至るまで、人間行動や社会を射程に入れる諸領域に大きな影響を及ぼしつつある。

演者は、コミュニケーションおよび社会的認知の発達と進化に関する理論的・実験的研究に興味を持って研究をおこなっている。本講演では、現在演者が共同研究者らとのチームで遂行中の、共感を巡る一連の研究を紹介させていただきたい。

まず最初に、こころのシステムとしての共感の、進化文脈上における捉える方について、Premack & Woodruff (1978) が提示した”Theory of Mind”概念を軸に理論的な整理をおこない、知性の進化における社会的知性／社会脳仮説が取り扱ってきたマキャベリの知性や Mind Reading の問題を取り扱う際に前提となる「自他をわかつ（分離する）こころのシステム」的側面に対して、「自他をまぜる（混同する）こころのシステム」として共感を捉える可能性を提示したい。

その上で、具体的な研究として、乳児期における表情伝染および、学童期における表情伝染の定型・非定型（ASD）群間の比較研究、自他間の認識論的ギャップを埋める行為としての自発的「教示」をヒト 1 才児前半で示唆した研究 (Meng & Hashiya, 2014)、「一人称複数 first person plural」としての”We”という語使用の発達研究等について紹介し、これらの研究の意味と展望について議論する。

本講演で紹介する研究の多くは、新学術領域研究「共感性の進化・神経基盤」の援助と協力のもとでおこなっている。本領域の全体像については、下記 HP をご参照いただきたい。<http://www.empatheticsystems.jp/>

第4回講演会

「光と生体リズム及び認知機能に関する講演会」

George Brainard 先生 (Thomas Jefferson University, USA)

Véronique Daneault 先生 (Hôpital du Sacré-Coeur de Montréal, Canada)

2015 年 3 月 20 日（金）、九州大学大橋キャンパス

開催趣旨

目から入った光の情報は明るさや色の知覚などの視覚的な処理だけではなく、脳の体内時計にも伝達され、24 時間の概日リズムの調節や睡眠、ホルモン分泌、体温、自律神経、瞳孔の対光反射など様々な生理機能へ影響を及ぼす。これらの光の作用は光の非視覚的な作用と呼ばれている。

人工照明のおかげで私たちは明るい夜を手に入れることができたが、その反面で夜の光が概日リズムや睡眠の乱れを引き起こす原因となっている。生体リズムの乱れは抑うつ、肥満、高血圧など様々な健康問題とも関連していることが明らかとなっている。

以上のことから、当センターにおいて、光と生体リズムに関する研究で世界的に活躍する二人の先生を招聘し、「光と生体リズム及び認知機能」と題して講演会を開催した。

George Brainard 先生の講演

「Photoreception for Circadian, Neuroendocrine and Neurobehavioral Regulation」

Brainard 先生はヒトにおいて光によるメラトニン分泌の抑制が青色光で最も強く起こることを世界で初めて発見した研究者である (Brainard et al., 2001)。後の研究で、この特徴的な光の作用は、メラノプシンと呼ばれる光感受性タンパクを含む網膜神経節細胞によって引き起こされていることが分かった。杆体と錐体以外にも網膜の中にもうひとつ新種の光感受性細胞があるという発見は当時大きな話題となった。

Brainard 先生には生体リズムや光の非視覚的な作用の基礎的な話だけではなく、国際宇宙ステーション (ISS) の乗組員の概日リズムを整えるための LED 照明の開発にも携わっておられ、これらの研究紹介も行われた。

Véronique Daneault 先生の講演

「Brain, Light and Cognition」

網膜への高照度の光照射がうつ病の治療に有効であることや、覚醒度や認知能に影響することが知られている。しかしながら、光が脳の中でどのように処理されているかよくわかっていない。Daneault 先生は光の脳機能へ作用機序を明らかにするために、最先端の脳機能計測法である fMRI（機能的脳磁気共鳴画像法）を用いて研究をしている研究者である。講演では、光の脳への作用が年齢によって異なることなども報告された。



Brainard 先生の講演会の様子



大橋キャンパス内での集合写真（左から4番目が Brainard 先生、その右隣りが Daneault 先生）

国際学生交流コロキウム

「Research Colloquium for Young Researchers 2015」

2015 年 8 月 31 日（月）、九州大学大橋キャンパス

開催趣旨

本センターの構成員の一部は芸術工学府芸術工学専攻デザイン人間科学国際コース（博士後期課程）に所属している。当コースでは英語のみで学位が取得できるプログラムを提供している。毎年 8、9 月には本コースの国際的広報も兼ねたサマースクール（Summer School）を開催している。

本スクールでは、将来本コースに進学を検討している者に対して旅費および滞在費等を支援し、実際に国際コースの授業やラボワーク（研究室活動）を 1～2 週間体験する機会を提供している。参加者は主に東アジア圏（韓国、台湾、中国など）、東南アジア圏（インドネシア、フィリピン、マレーシア、タイなど）の大学院修士学生や若手大学教員である。そして、センター構成員の研究室にてラボワークを受け入れている。

今回、応用生理人類学研究センターが主催となって、サマースクール参加者とセンター構成員の研究室研究員や学生が学術交流できる機会を設けた。双方が自身

の大学や研究内容を英語にて紹介し、交流を深めた。

参加者

サマースクール参加者 11 名、九州大学関係 14 名（教員 4 名、訪問教授 1 名、学術研究員 2 名、国際コース在籍生 4 名、大学院生・学部生 4 名）

プログラム

- 1) 応用生理人類学研究センターの紹介
- 2) 九州大学関係者による発表 6 件
（学術研究員による発表 2 件、デザイン人間科学国際コース学生による発表 2 件、デザイン人間科学コース修士課程学生による発表 2 件）
- 3) サマースクール参加者による発表 6 件
（生理人類学講座にてラボワークの者）



発表の様子



参加者の集合写真

第5回講演会

「熱中症予防のための暑熱環境評価」

Joo-Young Lee 先生 (Seoul National University, South Korea)

2016年2月5日（金）、九州大学大橋キャンパス

開催趣旨

近年の日本において夏季の猛暑や異常気象による熱波に起因した熱中症発症件数は非常に多く、深刻な問題となっている。特に体温調節機能の低下している高齢者においては、室内での熱中症発症も全体の約半数にのぼり、社会的問題となっており、熱中症の病態や予防についての知識の普及が望まれている。一方、消防士など過酷な現場で働く人々が着用している防護服は、高熱や火気から身体を守る機能を有しているが、高い身体活動量と密閉された衣服のために熱的負担が非常に高い。また、東北の震災後の原発事故以降、特殊防護服着用時の暑熱負担軽減のための方策がさまざまな分野で検討されている。熱的負担は長時間の消火活動や人命救助活動、除染作業を抑制する要因となる。

熱中症予防のための暑熱環境の評価指標として湿球黒球温度指数（Wet Bulb Globe Temperature、WBGT）があるが、衣服の影響は考慮されていなかった。近年、特殊防護服を含む着衣量によってWBGTを改良する試みがなされている。しかし、一般的には知られていないのが現状である。

本講演会では、韓国ソウル大学の Joo-Young Lee 教授に暑熱環境評価指標である WBGT の概要、暑熱環境における防護服の特性、特殊防護服も含めた衣服量による WBGT の調整について実際の運用方法を含めて講演いただいた。



講演会の様子

講演題目

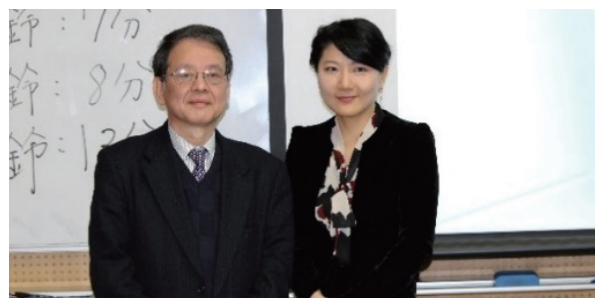
「Protective clothing in hot environments: WBGT and clothing adjustment factor」

内容

国際標準化機構（ISO）規格に登録されている WBGT に関して、その開発された背景と概要、そして WBGT に影響する要因について講演された。特に衣服による WBGT の修正は近年のトピックであり、参加者の WBGT に関する理解を深める内容であった。

講演内容の詳細については、以下のとおりであった。WBGT は暑熱環境を評価する指標である。その算出には黒球グローブ温度と湿球温度を使用するが、衣服については何の考慮もされていなかった。そこで、近年開発された衣服の保温性や蒸発抵抗などを考慮した effective WBGT（WBGT_{eff}）の考え方や実際の算出・運用方法について講演いただいた。

本講演内容は、当センターの環境適応部門における一軸である温熱環境とヒトの適応能に関する研究と密接に関連した内容であり、暑熱環境の評価、現代人の暑熱環境に対する耐性、そして衣服性能の評価につながる内容であり、非常に興味深い内容であった。



講演者の Joo-Young Lee 先生（右）と
座長の杉原先生（九州大学名誉教授）（左）

3. 活動報告（部門）

環境適応研究部門

部門研究会

- 第4回応用生理人類学研究センター主催セミナー「光と生体リズム及び認知機能に関する講演会」（開催日 2015 年 3 月 20 日）と題して Brainard 博士（Thomas Jefferson University, USA）と Daneault 博士（Montreal University, Canada）にご講演いただいた（詳細はセンター活動報告を参照）。
- 第5回応用生理人類学研究センター主催セミナー（開催日 2016 年 2 月 5 日）として Lee 博士（Seoul National University, South Korea）に「Protective clothing in hot environments: WBGT and clothing adjustment factor」についてご講演いただいた（詳細はセンター活動報告を参照）。



講演者の Lee 博士

国内学会での講演

- 日本家政学会被服衛生学部会 第34回被服衛生学セミナー（開催日 2015 年 8 月 28 日）にて、「子どもの体温調節機能」の題目にて招待講演（前田享史）
- 人類学若手の会第4回総合研究集会（開催日 2016 年 2 月 6 日）にて、「ヒトの耐寒性とその影響要因」の題目にて招待講演（前田享史）
- 日本視覚学会 2016 年冬季大会シンポジウム「光環境の人への影響」（学会開催日 2016 年 1 月 20 日～22 日）にて、「日中と夜間の光による生体リズム系への作用」の題目にて招待講演（小崎智照）

学会以外の国内講演

- 豊田中央研究所講演会（開催日 2016 年 2 月 16 日）にて、「寒冷時の産熱反応における生理的多型性」の題目にて招待講演（前田享史）
- 熊本版「白熱教室」ジェンダー入門、熊本大学にて「自然人類学からみた性差・ジェンダー・セクシュアリティー生物学的性差とジェンダーステレオタイプが強調される理由」の題目で招待講義（2015 年 8 月 26 日）（瀬口典子）

海外研究機関での講演

- モンタナ州立大学、ボーズマン校、人類・社会学部（Department of Sociology and Anthropology, Montana State University, Bozeman, USA）にて“A Career in Biological Anthropology: An Introduction of Bioarchaeology and Paleoanthropology Using Newer Laser Scan Approaches”の題目で招待講演（2016 年 3 月 23 日）（瀬口典子）

国内学会での活動等

- 日本照明学会「ヒューマンファクターを考慮した照明制御に関する特別研究委員会」の委員として（2015 年 6 月～）、ヒトの生体に適した光環境の指針提案に向けて活動中（小崎智照）

国際学会での受賞

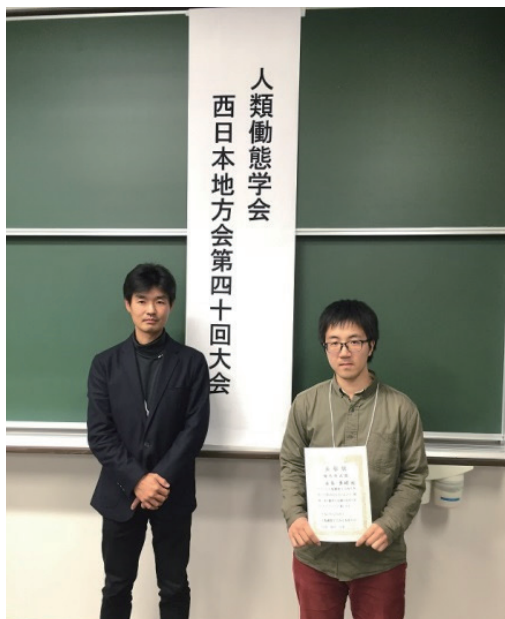
- 12th International Congress of Physiological Anthropology (ICPA) : Best Student Poster Award
Koji Kobayashi, Takafumi Maeda, Takeshi Yoneshiro, Mami Matsushita, Masayuki Saito: Relationship between Brown Adipose Tissue Activity and Subcutaneous Tissue Temperature of Supraclavicular Region during Mild Cold Exposure（2015 年 10 月）

国内学会での受賞

- 日本生理人類学会第71回大会優秀発表賞
高橋涼, 前田享史. 寒冷環境下における身体局所

加温が快適性および精神作業成績に及ぼす影響
(2015 年 5 月)

- 日本生理人類学会第 72 回大会優秀発表賞
小林功嗣, 鷹野翔一, 高屋敷亮太, 前田 享史, 米代
武司, 松下真美, 斉藤昌之. 寒冷曝露時の鎖骨上
窩皮下組織温と褐色脂肪活性の関係(2015 年 9 月)
- 人類動態学会西日本地方会第 40 回大会優秀発表
賞
日高勇樹, 武富龍之介, 小崎智照. 午前中の異な
る光が夜間照明によるメラトニン分泌抑制に与え
る影響. (2015 年 12 月)



受賞した日高氏（右）と小崎センター員（左）

大学間・部局間協定校との国際交流

- Affiliate faculty, Department of Anthropology, The University of Montana, Missoula, MT USA. (2012 年 9 月から現在まで) (瀬口典子)

国際共同研究

- アメリカ合衆国、モンタナ大学ミズーラ校人類学部および社会科学リサーチラボ (Department of Anthropology and Social Science Research Lab, the University of Montana, Missoula, MT USA) にて、3 次元デジタルライザーによる頭蓋骨の曲線形状データの取得方法とデータ視覚化のプロトコルを共同で作成 (2014 年 8 月 18 日から 10 月 24 日まで) (瀬口典子)
- アメリカ合衆国、モンタナ大学ミズーラ校人類

学部および社会科学リサーチラボ (Department of Anthropology and Social Science Research Lab, the University of Montana, Missoula, MT USA) にて、3 次元レーザースキャナー画像の編集・変換方法と頭蓋骨の曲線形状データの取得方法のプロトコルを共同で作成 (2015 年 3 月 10 日から 4 月 17 日まで) (瀬口典子)

- アメリカ合衆国、モンタナ大学ミズーラ校人類学部および社会科学リサーチラボ (Department of Anthropology and Social Science Research Lab, the University of Montana, Missoula, MT USA) にて、3 次元デジタルライザーにより取得した頭蓋骨曲線形状データと 3 次元スキャナーデータから取得した頭蓋骨曲線形状データの観察者内誤差、および観察者間誤差の検定を共同研究 (2016 年 3 月 8 日から 4 月 13 日まで)、および、今後の共同研究の方向性・方針について、モンタナ大学の考古学者も含めて 3 月に協議 (2016 年 3 月 29 日) (瀬口典子)

海外からの招待講演の企画・開催・司会・通訳

- デラウェア大学人類学教授・アメリカ自然人類学会会長、カレン・ローゼンバーグ教授 (Prof. Karen Rosenberg, Department of Anthropology, University of Delaware, USA. President of American Association of Physical Anthropology, USA) を招聘し、京都大学東京品川オフィスにおいて、「ヒトの多様性・ジェンダー・セクシュアリティをめぐる文理融合ワークショップ」を企画・開催。“Evolving Women: Childbirth and Infant Helplessness as Forces that Shaped Human Evolution” の題目でのカレン・ローゼンバーグ教授の招聘講演を司会、通訳。(2014 年 12 月 20 日) (瀬口典子)

3. 活動報告（部門）

アクティブライフ部門

部門研究会

- ・ アクティブライフ部門研究会（第1回）の開催
（開催日：2015年9月26日、会場：九州大学大橋キャンパス）

障がい者や高齢者の運動、健康、生活、スポーツに関して研究している研究者や学生39名（海外大学含む7校からの参加）が集まり、研究成果や計画などの発表（16件）・ディスカッションを行った。また、研究施設見学、懇親会を行った。



研究会の様子

学会関係

- ・ 日本人間工学会第56回大会シンポジウム企画「高齢者の生活および介護とロボット・アシスト機器」
（学会開催日：2015年6月13～14日、シンポジウム実施日：6月13日）

シンポジウムを企画し、「高齢者の生活・介護を助けるアシスト機器」の題目にて発表した（村木里志）。

イベント関係

- ・ ロコモサークル
ヒューマニティ部門・松隈准教授の研究室が主催する地域住民を対象とした「ロコモサークル」（大橋キャンパスにて月に平均2回開催：2015年4月～2016年3月）に協力した（ミニ講義、筋年齢測定など）。
- ・ 地域住民を対象とした筋年齢測定会
- ・ 熊本県スポーツ振興事業団・県民スポーツの日（ふれあいの日）（実施日：2015年10月12日（祝）、会場：

熊本県立総合体育館）

- ・ 福岡市早良保健所（健康まつり）（実施日：2015年10月2日（木）、会場：福岡市早良保健所）
- ・ 福祉人間工学研究室主催（実施日：2015年12月10日～11日、会場：九州大学大橋サテライト）
- ・ 総合せき損センター医用工学研究室の見学
（実施日：2015年10月14日、所在地：福岡県飯塚市）
せき髄損傷者の生活に関わる道具や環境に対して工学的技術支援や研究・開発、機器導入の相談・住宅改修プランの提案などの支援を行っている医用工学研究室を見学し、福祉用具の設計のポイントを学んだ。



総合せき損センター江原主任研究員の説明を聞く参加者

受賞

学術論文

- ・ Best Paper Award, 2014 fiscal year of International Journal of Biomedical Soft Computing and Human Science
Hiroko Noto, Satoshi Muraki. Effect of rear-wheel operation of a manual wheelchair on user's riding comfort and helper's physical strain while navigating steps" Vol.19, No.1, pp.17-22（2014年11月）
- ・ 日本人間工学会研究奨励賞
北村奨悟, 村木里志, 大江田知子, 澤田秀幸, 田原将行, 植田能茂, 渡久地政志. パーキンソン病患者の椅子からの起立動作の特徴. 人間工学 50 巻 5号: 265-270, 2014（2015年6月）

- 日本人間工学会研究奨励賞
横田知明, 村木里志. 松葉杖のグリップ径が杖使用時における手部の負担に及ぼす影響. 人間工学 50 巻 5 号: 286-293, 2014 (2015 年 6 月)

学会発表 (国際大会)

- 12th International Congress of Physiological Anthropology (ICPA) : Best Poster Award H i r o k i Nakashima, Irma Nur Afiah, Ping Yeap Loh, Kiyotaka Fukumoto, Osamu Fukuda, Satoshi Muraki. The relationships between walking motion and the muscles cross-sectional area in the lower limbs in the elderly. (2015 年 10 月)

学会発表 (国内大会)

- 人類労働学会西日本地方会第 39 回大会最優秀発表賞
新飼伸崇, 丸山翔平, 中島弘貴, Ping Yeap Loh, 村木里志, 歩行における足指接地と離地タイミングの個人差の分類. (2014 年 12 月)
- 人類労働学会西日本地方会第 39 回大会発表奨励賞
Ping Yeap Loh, 中島弘貴, 村木里志. The use of ultrasound technique to understand the behavior of median nerve at proximal carpal tunnel at different wrist angle. (2014 年 12 月)
- 平成 26 年度日本生理人類学会研究奨励発表会 (九州地区) 優秀発表賞
立野謙太, 横田知明, Ping Yeap Loh, 村木里志. 若年者と高齢者の運動学習に伴う筋電図表出の違い. (2015 年 1 月)
- 第 38 回日本音響学会春季研究発表会栗屋潔学術奨励賞
藤平晴奈, 白石君男. 音声に対する聴性脳幹反応からみた残響により単語理解度が低下する高齢者の特徴. (2015 年 3 月)
- 日本人間工学会第 56 回大会優秀研究発表奨励賞
中島弘貴, Irma Nur Afiah, Ping Yeap Loh, 村木里志. 高齢期に加齢変化する歩行指標の探索. (2015 年 6 月)
- 人類労働学会西日本地方会第 40 回大会最優秀発表賞
中尾瑞歩, 村木里志. 軟膏を背中に塗る道具の形

状についての検討. (2015 年 12 月)

国際交流

大学間・部局間協定校との交流

- ドイツ、ミュンヘン工科大学人間工学研究所 (Institute of Ergonomics and the Division of Sports Equipment and Material, Faculty of Mechanical Engineering, Technischen Universität München) を視察訪問 (2015 年 6 月 31 日)
- フランス、ベルフォール・モンベリヤール工科大学 Université De Technologie De Belfort-Montbéliard (UTBM) にて協定更新セレモニーに出席、今後の連携についての協議 (2015 年 7 月 1 日～4 日)
- オーストラリア、シドニー大学健康科学部 (Faculty of Health Science, The University of Sydney) を訪問し、今後の連携についての協議 (2015 年 8 月 14 日)
- 韓国、蔚山科学技術大学校 (School of Design & Human Engineering, Ulsan National Institute of Science and Technology) を訪問し、今後の連携について協議
- イギリス、ラフバラー大学デザインスクール (Design School, Loughborough University) を視察訪問 (2016 年 3 月 18 日)
- フランス、ベルフォール・モンベリヤール工科大学 Université De Technologie De Belfort-Montbéliard (UTBM) を訪問し、今後の連携についての協議 (2016 年 3 月 21 日～25 日)

海外大学との共同研究

- Oticon (Denmark): Language Specific Amplification Rationale and Language Specific Benefit from Different Compression Schemes (2014 年 9 月～2015 年 12 月)
- インドネシア、セベラスマレット大学 (Universitas Sebelas Maret) の Cucuk Nur Rosyidi 博士が国際共同研究にて九州大学を訪問し、小学校教室家具の研究調査を実施 (2015 年 1 月)

その他

- 6th International Conference on Applied Human Factors and Ergonomics (Las Vegas, USA, July 2015) にて蔚山科学技術大学校・Shuping Xiong 博士とオーガナイズドセッション (Ergonomics in Design and Technology) にて発表 (2015 年 7 月)

3. 活動報告（部門）

ヒューマニティ部門

講演会・研究会の開催

・第1回・第2回応用生理人類学研究センター特別講演会

Jin-Hun Sohn 教授（Chungnam National University, 韓国）第1回「Brain system underlying sexual compulsive behaviors」（2015年1月27日）、第2回「The effects of low frequency noise」（2015年2月3日）九州大学大橋キャンパス

・第3回応用生理人類学研究センター特別講演会

Lee Bae-Hwan 教授（College of Medicine, Yonsei University, 韓国）「Information processing and modulation of pain in the brain」（2015年2月5日）九州大学大橋サテライト

・日本生理人類学会若手奨励研究発表会・特別講演
橋彌和秀 准教授（九州大学人間環境学研究院）「共感というこころのシステムへのアプローチ」（2015年2月21日）九州大学大橋キャンパス

個別研究概要

1. 10分ランチフィットネスの効果検証

【共同研究：10分ランチフィットネス協会（樋口、金）】

職場の仲間と一緒に昼休みに行く10分間の軽い運動が集団の凝集性や表情認知に及ぼす影響を検証した。大学職員の方々の協力を得て約2か月間の運動介入を行った。その結果、インストラクターと一緒に運動を行った群では、運動を行わなかった対照群またはビデオを使って運動を行った群よりも、笑顔に対する感受性が高まることが分かった。



2. 在宅時の起立・着席運動を支援するシリアスゲームの開発に向けた高齢者への介入調査研究

【科研費 基盤研究A（松隈）】

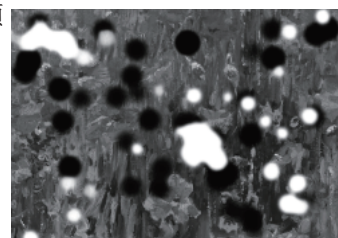
高齢者向けリハビリ・ヘルスケアを支援するシリアスゲームの研究開発を行っており、病院や介護施設との密な連携による効果検証と合わせてゲーム要素の医療・福祉分野への応用の可能性を提示している。



3. 遺伝的な色覚の多様性が感性の個人差に与える影響

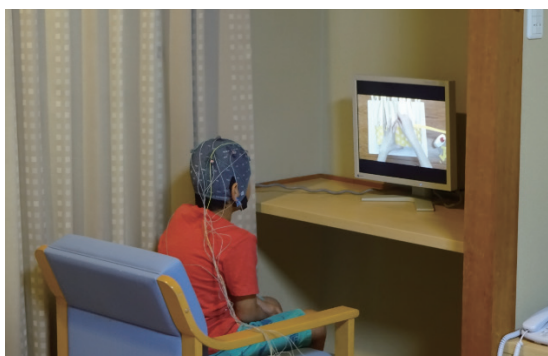
【科研費 若手研究B（平松）】

ヒトには色覚の多様性が存在し、2色型者など、一般3色型以外の色覚型者も少なくない。そのため、見えている世界が個人間で同質とは限らない。これまでの色覚多様性に関する研究により、カラーユニバーサルデザインが提案されるなど、社会への還元は進んできてはいるが、色覚多様性がどのように、色弁別以外の側面にまで影響を与えるかはほとんど検討されていない。そこで、色覚の多様性が、見え方の違いのみならず、よく生きることに関わるであろう感性にどう影響するかについて研究している。右下図は、予備実験における、絵画鑑賞時の2色型模擬条件と3色型条件の累積注視時間である。（白：2色型模擬、黒：3色型）。このように注目する領域の違いが、どのように絵画やグラフィック作品の印象に影響するのかを検討している。



4. 子どもの陶芸体験が脳のミラーシステムに及ぼす影響に関する研究（樋口）

志賀島国民休暇村にて子どもの陶芸体験と脳波の測定会を行った。ミラーシステムとは、他者の行為を観察しただけでも、自分がその行為を行うときに使用する脳部位が活性化する現象であり、他者行為の理解や運動模倣と関連していることが報告されている。実験では、陶芸の時の手の動きの映像を見た時に働くミラーシステムが、実際の陶芸体験の前後でどのように変化するかを検証した。写真上は陶芸体験の様子（陶芸体験はスタジオ Mu の協力を得て行った）。下写真は子どもの脳波測定の様子。



5. 「わたしたち」の起源：自己概念の拡張とその心理基盤の発達に関する多角的検討

【科研費 基盤研究 B（橋彌）】

コミュニケーションおよびその基盤となる「こころ」の起源にアプローチするため、進化・発達の両面から実験研究を行っている。現在の研究テーマとしては、乳幼児の社会的選好や、指さし等のジェスチャーの背景となる情報処理、マルチモーダルな意図解釈の可能性などの研究データをもとに、共感性および "We-ness"（「わたしたち」性）の成立過程に取り組んでいる。

6. 母親の情動抑制反応からみた脳活動の特徴（樋口、金）

母親と母親ではない女性を対象に情動抑制時の脳波を計測した。情動抑制とは、怒りや悲しみなどの自身を感じた情動を表出せずに抑制することであり、社会適応や精神的健康に関わっていると報告されている。実験では情動抑制を検討するために情動表情画像を用いた Go/Nogo 課題を行い、情動抑制時にあらわる前頭中心部の P300 成分の振幅の違いを検証した。

受賞関連

学会

樋口重和, 日本生理人類学会優秀研究賞, 日本生理人類学会（2015 年 5 月）

学会発表（国際大会）

17th World Congress of Psychophysiology(IOP2014), Best Young Presentation Award.

Motomura Y, Kitamura Y, Nakazaki K, Oba K, Katsunuma R, Katayose Y, Hida A, Moriguchi Y, Higuchi S, Mishima K. Recovery from potential sleep debt via sleep extension may improve emotion regulation.（2014 年 9 月）

12th International Congress of Physiological Anthropology (ICPA) : Best Poster Award

Nishimura Y, Suematsu A, Ikeda Y, Isoda K, Hisanaga I, Kim Y, Higuchi S, Effects of Imitating Experience on Brain Activities while Observing Images with Implied Motions（2015 年 10 月）

International Conference on Emotion and Sensibility 2015 (ICES 2015): Best Oral Presentation Award

Hayashi Y, Kim Y, Mother's emotional inhibition during a Go/No-Go task: an ERP study（2015 年 11 月）

3. 活動報告（部門）

レジリエンスデザイン部門

活動概要

レジリエンスデザイン部門は、それぞれのメンバーが「レジリエンスデザインに関する生理人類学的検討」「レジリエンスデザインの実践と方法論の構築」「認知機能のレジリエンス向上に関わる研究」「心理社会的ストレスと生活習慣病が健康に及ぼす影響」「集団における人間の心理と行動」などのテーマを基本に、統合的なレジリエンスデザイン研究をめざしている。

個別研究概要

1. レジリエンスデザインの概念や方法論の構築

レジリエンスデザインは現在発展中の概念でありデザイン手法である。必ず起こる緊急事態への対応をレジリエンスでデザインとして学術的に行うべく、生理反応による感性科学研究や実践的レジリエンスデザイン研究などをベースに、未構築の概念や方法論を構築していく。

・研究資料「レジリエンスデザイン試論」、尾方義人・劉瑾・末村裕子、芸術工学研究 Vol. 23, 59-63, 2015.08
・作品「レジリエンスデザイン」、森富秀宜・藤山遼太郎・鄒夢ティ、第7回九州・沖縄地区 学生デザイン展 優秀賞、日本デザイン学会、2015.06

2. 子育て支援プロダクト創出のための科学的エビデンスの構築

【科研B（代表 藤智亮、分担 綿貫茂喜）平成27年度～平成30年度】

約6割の母親は育児に対して負担感や困難感などの否定的感情をもっている。この原因の一つは、本来ヒトはみんなで子を育てる動物であるにも係わらず、現代の母親は一人で子を育てざるを得ない状況にあることによると考えられる。本研究では、育児に悩む母親のレジリエンス向上に役立てるために、様々な刺激に対する児の鎮静反応を科学的に明らかにする。具体的には、現在は3～8ヶ月児に対して、揺動刺激および

音刺激を与えたときの児の反応（表情、覚醒度、心拍数など）を調べている。

3. 被災地におけるレジリエンスデザイン研究

【P&P（九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト）（尾方義人・藤智亮・能登裕子・松尾晃成・末村祐子）平成27～28年度】

岩手県岩泉町などを調査対象とし、被災者がどのように劣悪な環境を乗り越えてきたかを現状の生活から読み解き、その知恵を一般化し新たな製品設計や問題提議に連結していくための研究。

・1/17～19 3/2～4 盛岡復興庁・岩泉町・仙台市・名取市、打ち合わせ・調査、その他媒体調査より仮設住宅家電デザイン案を策定した。

4. 認知機能のレジリエンスに関する基礎的研究

【共同研究 株式会社サムライト（尾方義人・藤智亮）平成27年度】

高齢者の認知機能低下をどのように予防（適応・回復）しているかを説明するための導入的研究。「前より元気になった気がする」を客観的に説明するための方法の研究。おおよそ、行為の分析→行為のモデル化→計測方法設計→量的計測の流れで研究を行う。その研究成果に基づくソフトウェアを開発中。

・口頭発表「認知症予防活動」理解のための行為分析、劉瑾・尾方義人・藤智亮・光岡真里・藤田徹郎、日本デザイン学会第五支部大会、2015.10.24

5. 災害時のための人力運搬具に関する研究

【共同研究（藤智亮、河原雅典）平成27年度】

災害初期に頼れるのは人力のみである。本研究では、災害発生時に自力で移動することが困難な人を一人で背負って避難するための背負子を開発する。まずは40～50歳代の女性（若い男性のように体力が無い）が人（同居する高齢者を想定）を背負い、徒歩で500mを15分で避難することを目標として開発を行っている。

6. レジリエンスデザイン学研究的資料としての、映像の活用方法の研究

ー被災地や被災者のレジリエンスデザインへの貢献ー【NHK 番組学術利用トライアル研究（尾方義人）, 平成 27～28 年度】

「仮設住宅」をうつしだすことを本来の目的にしていけないドキュメンタリーから、仮設住宅や仮設住宅利用者の生活（道具や家電や空間）をデザイン学の方法で読み解き、次に生かしていくためのレジリエンスデザインの方法を構築する。被災地や被災者の住宅や生活を生活の中に入り込んで取材をすることは大変難しい。しかしそこにある被災者の苦労や努力・思いをデザイン学の方法では読み解くことができる。被災者に負担をかけることなく実際の映像を読み解いていく事で、被災者の経験が必ず起こりえる次の災害に役立つものをつくる要件になりえる。被災者自身が減災に協力でき、アーカイブスの新しい意義も抽出できる。

7. レジリエンストランスポート商品開発研究

【共同研究 株式会社アーバンゲット（尾方義人・藤智亮）平成 27-28 年度】

被災地では、移動・運搬の問題は非常に切実で重要である。都市間の効率的な物資・食料の輸送の問題も大きい。しかし、瓦礫や隆起・陥没した地面での移動や給水所と自宅の間の水の運搬、仮設住宅敷地内の移動、避難所内での移動など、数～数百メートルの移動が重要な場合もある。「ウルトラ ショートレンジモビリティ」「マイクロモビリティ」が重要である。

また、日常から非日常へ変わる場合のトランスポートの機能変化や新たな輸送機能や形態の確保など移動体としての輸送運搬系上の抽出を行う。更に、電動でのアシストの仕組みを取り入れた移動体やモジュールシステムの考えを取り入れデザイン開発を行っている。

8. 幼児の脚の健康のためのレジリエンスメソッド

【共同研究 多久市（柴田英俊・尾方義人）平成 27-28 年度】

幼児足変形の早期発見は健康のために不可欠である。早期発見には幼児の足計測が重要であるが、わが国には明確な計測基準がない。よって、幼児の計測基準づくりとその方法の構築が必要である。

幼児の足計測基準を設けて多くの子どもを計測および分析することで、現在の幼児期の生活及び保育環境、運動量や幼児が使用している生活用品が適切なかを把握する。そしてその結果を環境や道具等へ還元し、足の変形予防のためのレジリエンスデザイン、変形した足の形状を復元するためのトレーニングとしてのレジリエンスデザインなど、健康にデザイン手法を取り入れた新しいアプローチを提案する。

・新聞掲載「子供の健康 まず足から」西日本新聞、2015.02.20

9. 紙おむつのリサイクル廃プラスチックレジリエンスシステム【共同研究 トータルケア・システム株式会社、アトラス化成株式会社、福岡県リサイクル総合研究事業化センター（尾方義人）平成 27-28 年度】

「地球環境」と「高齢福祉社会」の問題はこれからの時代に求められる課題である。高齢福祉社会化が進むなか、紙おむつの需要はますます増えている。現状では、ゴミとして焼却処理される紙おむつを水溶化処理し、パルプを分解回収し、再度紙おむつ用パルプとして利用している。さらにもう一つのプラスチックにおいても、地域社会の問題を解決するためのレジリエンスデザインとして、具体的なデザイン開発を行っていく。高齢化福祉社会に不可欠な『紙おむつ』を通して、高次元の資源循環型社会の形成を目指していく。

10. 長崎県の都市部における恒常性維持負荷度を指標とした生活習慣と全身的協関の相関研究

【科研 C（分担：山田クリス孝介）平成 25 年度～平成 27 年度】

個々のヒトが生きる自然・社会環境の変化に対して身体内の恒常性を維持するために（環境へ適応するために）費やしてきた「累積的な負荷」を恒常性維持負荷 (Allostatic Load: AL) という。この AL は各種の生理検査から指標化され、測定時以降の死亡や認知的・生理的機能などの低下と有意に相関することが実証されている。AL を有効に活用することで、より健康で幸福な生活を送るために地域社会のレジリエンスを高めることが期待できる。本研究では、長崎県の離島住民を対象に AL を測定し、伝統的な生活習慣との関連を調べることを目的とした。地域社会の特徴を明らかにし施策等に生かせるような計画を立案中である。

構成員研究業績一覧（2014 - 2015 年）

安河内朗

【著書】

安河内朗 . 生理的多型性 (pp.173-175), 全身的協同 (pp.176-177), 情動・感情 (pp.217-219), 環境適応能 (pp.373-375). 人間科学の百科事典 (日本生理人類学会編), 丸善出版, 2015

【論文】

Yasuko Takezawa, Kazuto Kato, Hiroki Oota, Timothy Caulfield, Akihiro Fujimoto, Shunwa Honda, Naoyuki Kamatani, Shoji Kawamura, Kohei Kawashima, Ryusuke Kimura, Hiromi Matsumae, Ayako Saito, Patorick E Savage, Noriko Seguchi, Keiko Shimizu, Satoshi Terao, Yumi Yamaguchi-Kabata, Akira Yasukouchi, Minoru Yoneda, Katsushi Tokunaga. Human genetic research, race, ethnicity and the labeling of populations: recommendations based on an interdisciplinary workshop in Japan. BMC Medical Ethics, 15:33, 2014 (doi:10.1186/1472-6939-15-33)

【学会発表】

< 国際発表 >

Saki Tanaka, Akira Yasukouchi. The Effects of RGB Wavelength of Polychromatic LED Light Sources on Melatonin Suppression. The 1st Asia Conference On Ergonomics and Design 2014, Korea, Feb 2014

Titus Wijayanto, Su-Young Son, Akira Yasukouchi, Yutaka Tochihara. Thermoregulatory responses during exercise in warm-humid and hot-dry in Indonesian and Japanese males. International Symposium on Human Adaptation to Environment and Whole-body Coordination, Japan, Mar 2015

Saki Tanaka, Yasuhiko Maeda, Masataka Makizoe, Kousuke Okunaga, Akira Yasukouchi. Effect of light exposure in the daytime on non-visual function at night and individual variation. International Symposium on Human Adaptation to Environment and Whole-body Coordination, Japan, Mar 2015

Qian Xie, Yuki Takesue, Tomoaki Hirata, Akira Yasukouchi. Effect of light conditions on performance and arousal level in the morning and evening. International Symposium on Human Adaptation to Environment and Whole-body Coordination, Japan, Mar 2015

Honami Yamashita, Yuki Otsuka, Akira Yasukouchi. Effect of room temperature and color temperature of lighting on cutaneous thermal sensitivity. International Symposium on Human Adaptation to Environment and Whole-body Coordination, Japan, Mar 2015

Yichi Zhang, Yandan Lin, Jingjing Qiu, Kaoru Inami, Sangil Lee, Akira Yasukouchi, Sigekazu Higuchi. Comparison of Sleep Habits and Chronotype between Japanese and Chinese Students. The 12th International Congress of Physiological Anthropology, Japan, Oct 2015

< 国内発表 >

田中 淳季, 前田康彦, 牧添正貴, 奥永浩輔, 樋口重和, 安河内朗. 朝及び夜間の光環境が非視覚的生理反応に及ぼす影響およびその個人差. 日本生理人類学会第 72 回大会, 2015 年 5 月

本田浩祐, 岩屋亮太, 安河内朗. 朝型・夜型の行動嗜好性が運動時の体温調節反応に与える影響と日内差. 日本生理人類学会第 72 回大会, 2015 年 5 月

大塚優希, 山下穂南美, 安河内朗. 皮膚温度感受性の性差と月経周期による違い. 日本生理人類学会第 72 回大会, 2015 年 5 月

【その他】

< 受賞 >

日本生理人類学会研究奨励発表会 優秀発表賞 (2016 年 2 月). 大塚優希, 安河内朗. 皮膚温度感受性に月経周期及び湿度が及ぼす影響

前田享史

【著書】

前田享史. 耐寒性 (pp.289-291), 極地 (pp.362-363), 人間科学の百科事典 (日本生理人類学会編), 丸善出版, 2014.11

【論文】

前田享史. 暑熱環境下における身体局所冷却が精神作業成績に及ぼす影響. 空調調和・衛生工学, 88(10): 993-998, 2014

前田享史, 樋口重和. 特集 生体機能のパリエーション 序文. 日本生理人類学会誌, 19(4): 275, 2014

前田享史. 特集 代謝機能からみた全身的協同と適応能 序文. 日本生理人類学会誌, 20(4): 207, 2015

【学会発表】

< 国際発表 >

Maeda T, Sakurai H, Takano S. Seasonal variation in basal metabolic rate and thermogenic response to cold. 19th Congress of the European Anthropological Association, Russia, Aug 2014

Maeda T, Takano S, Kobayashi K. Effect of seasonal variation in basal metabolic rate on cold-induced thermogenesis. International Symposium on Human Adaptation to Environment and Whole-body Coordination, Japan, Mar 2015

Kikuchi R, Maeda T. Evaluation of pleasantness by acute changing in air temperature. The 8th Thermoregulation Research Seminar of Japan Society of Physiological Anthropology, Japan, Mar 2015

Kobayashi K, Maeda T, Takano S. Study on seasonal variation in cold-induced thermogenesis and its influence factors. The 8th Thermoregulation Research Seminar of Japan Society of Physiological Anthropology, Japan, Mar 2015

Takahashi R, Maeda T. Effects of local heating under the cold environment on comfortable feeling and mental task performance. The 8th Thermoregulation Research Seminar of Japan Society of Physiological Anthropology, Japan, Mar 2015

Takahashi R, Maeda T. Effects of air temperature on mental task performance. The 8th Thermoregulation Research Seminar of Japan Society of Physiological Anthropology, Japan, Mar 2015

Kishino S, Maeda T. Study on the influence factors on local cold tolerance. The 8th Thermoregulation Research Seminar of Japan Society of Physiological Anthropology, Japan, Mar 2015

Kobayashi K, Maeda T, Yoneshiro T, Matsushita M, Saito M. Relationship between brown adipose tissue activity and subcutaneous tissue temperature of supraclavicular region during mild cold exposure. The 12th International Congress of Physiological Anthropology, Japan, Oct 2015

Maeda T. Phenotype of cold-induced thermogenic responses. The 12th International Congress of Physiological Anthropology, Japan, Oct 2015

< 国内発表 >

前田享史. 子どもの体温調節機能. 日本家政学会被服衛生学部会 第 34 回被服衛生学セミナー, 2015 年 8 月 (招待講演)

前田享史. ヒトの耐寒性とその影響要因. 人類学若手の会第 4 回総合研究集会, 2016 年 2 月 (招待講演)

前田享史. 寒冷時の産熱反応における生理的多型性. 豊田中央研究所講演会, 2016 年 2 月 (招待講演)

高屋敷亮太, 前田享史, 丸本健人, 菊地良平. 室内の湿度環境が唾液中の分泌型免疫グロブリン A 及びコルチゾールに及ぼす影響. 日本生理人類学会第 70 回大会, 2014 年 6 月

高橋涼, 前田享史, 奥山祐輝, 仲村不二子. 寒冷環境下における身体局所加温が快適感と作業成績に与える影響. 日本生理人類学会第 70 回大会, 2014 年 6 月

鷹野翔一, 前田享史, 小林功嗣. 寒冷曝露時の産熱反応と鎖骨上窩・大腿皮下組織温の関係. 日本生理人類学会第 71 回大会, 2014 年 11 月

岸野慎太郎, 前田享史. 上腕圧迫による静脈阻血が寒冷誘発血管拡張反応に及ぼす影響. 日本生理人類学会第 71 回大会, 2014 年 11 月

菊地良平, 前田享史. 急激な室温低下が生理心理反応に及ぼす影響. 日本生理人類学会第 71 回大会, 2014 年 11 月

高橋涼, 前田享史. 寒冷環境下における身体局所加温が快適性および精神作業成績に及ぼす影響. 日本生理人類学会第 71 回大会, 2014 年 11 月

小林功嗣, 鷹野翔一, 高屋敷亮太, 前田享史, 米代武司, 松下真美, 斉藤昌之. 寒冷曝露時の鎖骨上窩皮下組織温と褐色脂肪活性の関係. 日本生理人類学会第 72 回大会, 2015 年 5 月

高屋敷亮太, 前田享史, 福井佑梨, 小林功嗣. 下肢温浴が高齢者の唾液中分泌型免疫グロブリン A に及ぼす影響. 日本生理人類学会第 72 回大会, 2015 年 5 月

小林功嗣, 前田享史, 米代武司, 松下真美, 斉藤昌之. 鎖骨上窩皮下組織温から見た褐色脂肪活性. 第 23 回 衛生工学シンポジウム, 2015 年 11 月

【その他】

< 受賞 >

日本生理人類学会第 70 回大会優秀発表賞 (2014 年 11 月). 高橋涼, 前田享史, 奥山祐輝, 仲村不二子. 寒冷環境下における身体局所加温が快適感と作業成績に与える影響

日本生理人類学会第 71 回大会優秀発表賞 (2015 年 5 月). 鷹野翔一, 前田享史, 小林功嗣. 寒冷曝露時の産熱反応と鎖骨上窩・大腿皮下組織温の関係

日本生理人類学会第 72 回大会優秀発表賞 (2015 年 9 月). 小林功嗣, 鷹野翔一, 高屋敷亮太, 前田享史, 米代武司, 松下真美, 斉藤昌之. 寒冷曝露時の鎖骨上窩皮下組織温と褐色脂肪活性の関係

12th International Congress of Physiological Anthropology (ICPA), Best Poster Award (Oct 2015). Kobayashi K, Maeda T, Yoneshiro T, Matsushita M, Saito M. Relationship between brown adipose Tissue activity and subcutaneous tissue temperature of supraclavicular region during mild cold exposure

< 特許, デザイン, 作品, 新聞・雑誌等への掲載 >

体温調節機能と血管柔軟性の関係に関する研究について取材を受けた内容が、日本経済新聞 (2016 年 1 月 30 日) に掲載.

小崎智照

【著書】

小崎智照 (2015) 立体視 (p243-244), 方向感覚 (p264-266), 感覚の年齢差・性差 (p273-274). 実験計画法 (p591-593), 人間科学の百科事典 (日本生理人類学会編), 丸善出版, 2015

【論文】

Kozaki T, Kubokawa A, Taketomi R, Hatae. Effects of day-time exposure to different light intensities on light-induced melatonin suppression at night. Journal of Physiological Anthropology, 34, 27, 2015. (doi 10.1186/s40101-015-0067-1)

Kozaki T, Kubokawa A, Taketomi R, Hatae. Light-induced melatonin suppression at night after exposure to different wavelength composition of morning light. Neuroscience Letters, 616, 1-4, 2016.

【学会発表】

< 国際発表 >

Kozaki T, Taketomi R, Hatae K, Kubokawa A. Effect of bluish morning light on light-induced melatonin suppression at nighttime. 5th International Conference on Applied Human Factors and Ergonomics, Poland, July 2014

Kozaki T, Taketomi R, Hatae K, Kubokawa A. Effect of different wavelength composition of morning light on light-induced melatonin suppression at nighttime. International Symposium on Human Adaptation to Environment and Whole-body Coordination, Japan, Mar 2015

Kozaki T, Katami K, Arata T, Takakura J. Light-induced melatonin suppression on different flicker frequency of the light. The 12nd International Congress of Physiological Anthropology, Japan, Oct 2015

Kozaki T, Taketomi R, Hatae K, Kubokawa A. Effects of different wavelength composition of morning light on light-induced melatonin suppression at nighttime. The CIE Lighting Quality and Energy Efficiency Conference,

Australia, Mar 2016

< 国内発表 >

小崎智照, 久保川彩花, 武富龍之介. 夜間照明によるメラトニン分泌抑制を軽減する午前中の青色光の有効性について. 照明学会第 47 回全国大会, 2014 年 9 月

波多江圭輔, 橋口暢子, 小崎智照. 急性低圧環境下での皮膚温度感受性. 日本生理人類学会第 71 回大会, 2014 年 11 月

小崎智照, 傍示顕信, 荒田俊彦, 高倉潤也. 異なる点滅条件の光曝露がメラトニン分泌へ与える影響. 日本生理人類学会第 71 回大会, 2014 年 11 月

武富龍之介, 久保川彩花, 小崎智照. 午前中の青色照明が夜間照明によるメラトニン分泌抑制に与える影響. 日本生理人類学会第 71 回大会, 2014 年 11 月

永野和希, 伊東奈菜, 小崎智照. 練習による心的回転課題成績の変化. 日本生理人類学会第 71 回大会, 2014 年 11 月

小崎智照, 武富龍之介, 久保川彩花. 午前中の異なる波長構成の光曝露による夜間照明のメラトニン分泌抑制作用の軽減効果. 人類動態学会西日本地方会第 39 回大会, 2014 年 12 月

傍示顕信, 小崎智照. 定常光と高速点滅光がメラトニン分泌抑制に及ぼす影響. 平成 27 年度照明学会全国大会, 2015 年 8 月

日高勇樹, 武富龍之介, 小崎智照. 午前中の異なる曝露量の光が夜間照明によるメラトニン分泌抑制へ与える影響. 人類動態学会西日本地方会第 40 回大会, 2015 年 12 月

小崎智照. 日中と夜間の光による生体リズム系への作用, 日本視覚学会 2016 年冬季大会, 2016 年 1 月

【その他】

< 受賞 >

人類動態学会西日本地方会第 40 回大会優秀発表賞 (2015 年 12 月). 日高勇樹, 武富龍之介, 小崎智照. 午前中の異なる光が夜間照明によるメラトニン分泌抑制に与える影響.

瀬口典子

【論文】

Brace CL, Seguchi N, Nelson AR, Pan Q, Umeda H, Wilson M, Brace ML. The Ainu and Jomon Connection. In Kennewick Man: The Scientific Investigation of an Ancient American Skeleton. Edited by Douglas W. Owsley and Richard L. Jantz. Texas A&M Press, College Station. 463-471. 2014

Schmidt Ryan W, Seguchi N. Jomon Culture and the peopling of the Japanese archipelago: advancements in the fields of morphometrics and ancient DNA. Japanese Journal of Archaeology, 2: 34-59. 2014

Schmidt Ryan W, Seguchi, N. Craniofacial variation of the Xiongnu nomads of Mongolia reveals their possible origins and population history. Quaternary International, 2014; 313, 2014 (doi:10.1016/j.quaint.2014.11.035)

Yasuko Takezawa, Kazuto Kato, Hiroki Oota, Timothy Caul_eld, Akihiro Fujimoto, Shunwa Honda, Naoyuki Kamatani, Shoji Kawamura, Kohei, Kawashima, Ryusuke Kimura, Hiromi Matsumae, Ayako Saito, Patorick E Savage, Noriko Seguchi, Keiko Shimizu, Satoshi Terao, Yumi Yamaguchi-Kabata, Akira Yasukouchi, Minoru Yoneda, Katsushi Tokunaga. Human genetic research, race, ethnicity and the labeling of populations: recommendations based on an interdisciplinary workshop in Japan. BMC Medical Ethics, 15:33, 2014 (doi:10.1186/1472-6939-15-33)

瀬口典子. 骨から見るヒトの多様性. 特集 中等教育でまなぶ「人種」「民族」とヒトの多様性. 「学術の動向」7月号 日本学術会議. 68-71. 2014.

【学会発表】

< 国際発表 >

Seguchi N, Quintyn C.B., Takamuku H, Yonemoto S. An assessment of phenotypic adaptation of the prehistoric Jomon hunter-gatherers and the Yayoi agriculturalists of Japan: A study of postcranial indices, ratios, and body mass versus eco-geographical variables. The 83rd Annual meeting of American Association of Physical Anthropologists. Canada, April 2014.

Dudzik B, Seguchi N. Testing the Dual-Structure hypothesis for the colonization of the Japanese Archipelago: Evidence from southern Japan. The 83rd Annual meeting of American Association of Physical Anthropologists. Canada, April 2014.

Seguchi N, Quintyn C. Variation in body and limb proportions between Early and Archaic Americans and the prehistoric Jomon of Japan. The 84th Annual meeting of American Association of Physical Anthropologists. USA, March 2015

< 国内発表 >

瀬口典子, Brace CL. ケネウイックマンから探る「アイヌ・縄文コネクション」とアメリカ大陸最古の先住民の起源. “The Ainu and Jomon connection” with Kennewick Man and the sources of the first inhabitants of the New World. 日本人類学会第 68 回大会, 2014 年 11 月

白石君男

【著書】

白石君男, 他 217 名. 音バリエフリー (p.482). 音響キーワードブック (日本音響学会編), コロナ社, 2016

【論文】

白石君男. 聴き手から見た屋内空間の音バリエフリー, 騒音制御 38(2): 83-88, 2014

白石君男. 子どもの聴覚と音環境, 騒音制御 38 (3): 201-204, 2014

Fujihira H, Shiraishi K. Correlations between word intelligibility under reverberation and speech auditory brainstem responses in elderly listeners, Clinical Neurophysiology, 126(1): 96-102, 2015

白石君男. 病院の音環境－聴覚障害者の観点から－. 騒音制御 39 (4): 1-4, 2015

白石君男. 子どもの聴覚発達と音環境. 日本音響学会誌, 72(3): 137 – 143, 2016

Murakami T, Shiraishi K, Nakagawa T. Classification of noise and environmental stimuli by the auditory impression of cochlear implants users, Medical bulletin of Fukuoka University, 43(1): 17-26, 2016

【学会発表】

< 国際発表 >

Shiraishi K, Hirokawa K. Effectiveness of the sound field amplification system in an open plan classroom of an elementary school. International Pediatric Audiology Conference, China, Apr 2014

Shiraishi K, Fujihira H. Effectiveness of a hearing loop (magnetic induction) system in a bus for elderly people. XXXII World Congress of Audiology, Australia, May 2014

Fujihira H, Shiraishi K. Brain stem responses to reverberant speech in elderly listeners. XXXII World Congress of Audiology, Australia, May 2014

Hasuo E, Ueda K, Kishida T, Fujihira H, Morimoto S, Remijn G, Shiraishi K, Tobimatsu S, Nakajima Y. Duration perception of filled and empty intervals—a study with magnitude estimation and electroencephalography. 13th International Conference on Music Perception and Cognition, South Korea, Aug 2014

Fujihira H, Shiraishi K. Effects of reverberation on auditory brainstem responses (ABRs) to speech in elderly listeners. XXIV Biennial Symposium of the International Evoked Response Audiometry Study Group (IERASG), South Korea, May 2015

< 国内発表 >

白石君男, 石文婷, 藤平晴奈. 音声刺激に対する頭頂部緩反応 (SVR) —若年者と高齢者における検討—. 第 9 回日本聴覚医学会 ERA・OAE 研究会, 2014 年 7 月

白石君男, 藤平晴奈, 斎藤睦巳, 高木英行. 音響学からみた耳鳴検査と最近の研究. 日本音響学会 2014 年秋季研究発表会, 2014 年 9 月

白石君男, 上田麻理. 耳鳴りと音バリエフリー. 日本音響学会 2014 年秋季研究発表会, 2014 年 9 月

上田麻理, 蘆原郁, 高橋弘宜, 白石君男. 実環境下における児童及び若年者の高周波数聴覚閾値の測定, 第 59 回日本聴覚医学会, 2014 年 11 月

藤平晴奈, 白石君男. 高齢者における残響を付加した音声に対する聴性脳幹反応と単語了解度との関連性. 第 59 回日本聴覚医学会, 2014 年 11 月

藤平晴奈, 白石君男. 音声に対する聴性脳幹反応からみた残響により単語了解度が低下する高齢者の特徴. 日本音響学会 2015 年春季研究発表会, 2015 年 3 月

飯田阿希奈, 白石君男, 藤平晴奈, 松山秋絵. 補聴器適合検査における音声聴取時の背景音の許容性評価に関する検討. 日本音響学会 2015 年春季研究発表会, 2015 年 3 月

松山秋絵, 白石君男, 藤平晴奈, 飯田阿希奈. 骨導補聴器の両耳装用時における音の方向知覚. 日本音響学会 2015 年春季研究発表会, 2015 年 3 月

山本洗, 内田匠, 藤平晴奈, 白石君男. 音声聴取時の騒音許容性と脳幹での音声周波数情報の符号化に関する検討. 第 10 回日本聴覚医学会 ERA・OAE 研究会, 2015 年 7 月

内田匠, 藤平晴奈, 白石君男. 音声刺激のスピーカ呈示による聴性脳幹反応の記録方法に関する検討. 第 10 回日本聴覚医学会 ERA・OAE 研究会, 2015 年 7 月

藤平晴奈, 白石君男. 音声に対する聴性脳幹反応の測定と解析およびその応用, 第 10 回日本聴覚医学会 ERA・OAE 研究会, 2015 年 7 月

木下光太郎, 藤平晴奈, 白石君男. 対比較対話型差分進化を用いた耳鳴音探索システムに関する検討. 第 1 回 日本聴覚医学会耳鳴・難聴研究会, 2015 年 7 月

藤平晴奈, 白石君男. 残響を付加した 2 音節の音声に対する高齢者の聴性脳幹反応. 日本音響学会 2015 年秋季研究発表会, 2015 年 9 月

上田麻理, 俣野祐美, 及川靖広, 中村健太郎, 白石君男. 高齢者施設の音響環境計測と補聴支援機器導入の試み. 日本音響学会 2015 年秋季研究発表会, 2015 年 9 月

白石君男, 米田幸司, 緒方隆哉. バスおよび公共窓口等におけるヒアリング・ループの展開について. 日本音響学会 2015 年秋季研究発表会, 2015 年 9 月

村上健, 白石君男, 塚原恵, 永田里恵, 中川尚志. 高齢者における雑音および環境騒音の聴覚的印象評価の検討. 第 60 回日本音声言語医学会, 2015 年 10 月

白石君男, 平島ユイ子, 村上健, 塚原恵. 聴覚障害・構音障害児童のための発音指導支援システムの開発とアンケートによる評価. 第 60 回日本音声言語医学会, 2015 年 10 月

白石君男, 和田牧子, 大橋節子. 日本語音声に対する補聴器の幅特性に関する検討. 第 60 回日本聴覚医学会, 2015 年 10 月

上田麻理, 小森智康, 白石君男. 高齢者を対象とした音声聴取能力測定の試み. 第 60 回日本聴覚医学会, 2015 年 10 月

藤平晴奈, 白石君男. 高齢者における残響を付加した 2 音節の刺激に対する聴取成績と聴性脳幹反応との関連性, 日本音響学会 2016 年春季研究発表会, 2016 年 3 月

【その他】

< 受賞 >

日本音響学会第 38 回春季研究発表会栗屋潔学術奨励賞 (2015 年 3 月). 藤平晴奈, 白石君男. 音声に対する聴性脳幹反応からみた残響により単語了解度が低下する高齢者の特徴.

村木里志

【著書】

村木里志. 筋紡錘 (p67-68), 運動単位 (p69-70), 寿命 (p436-437). 人間科学の百科事典 (日本生理人類学会編), 丸善出版, 2015

【論文】

Purwaningrum L, Xiong J, Funatsu K, Rosyidi CN, Susmartini S, Muraki S. Study of children's holding positions to redesign elementary school chairs for easy lifting and turning. Proceeding of 3rd International Conference of South East Asian Network of Ergonomics Society, 2014

Muraki S, Nakashima H, Fukumoto K, Fukuda O. Circumference and muscle cross-sectional area of the thigh and calf in elderly Japanese people. Proceeding of 3rd International Conference of South East Asian Network of Ergonomics Society, 2014

Afiyah IN, Nakashima H, Muraki S. Age-related changes in the walking motion of Japanese men: Basic analysis of gait. Proceeding of 3rd International Conference of South East Asian Network of Ergonomics Society, 2014

Afiyah IN, Nakashima H, Muraki S. Age-related changes in walking motion of Japanese females: Basic analysis of gait motion. Proceedings of the 1st Asian Conference on Ergonomics and Design 2014

Loh PY, Muraki S. Deformation of median nerve during active and passive wrist holding at proximal carpal tunnel. Proceedings of the 1st Asian Conference on Ergonomics and Design 2014

Xiong J, Muraki S, Fukumoto K. The effects of touch button size to the operability of touchscreen. Proceedings of the 1st Asian Conference on Ergonomics and Design 2014

Purwaningrum L, Muraki S. The observation of children's holding position to redesign elementary school chair for easy carrying and moving. Proceedings of the 1st Asian Conference on Ergonomics and Design 2014

Son S, Bakri I, Muraki S, Tochihara Y. Comparison of firefighters and non-firefighters and the test methods used regarding the effects of personal protective equipment on individual mobility. Applied Ergonomics, 45(4):1019-1027, 2014

Horiuchi M, Muraki S, Horiuchi Y, Inada N, Abe D. Energy cost of pushing a wheelchair on various gradients in young men. International Journal of Industrial Ergonomics, 44(3):442-447, 2014

Xiong J, Muraki S. An ergonomics study of thumb movements on smartphone touch screen. Ergonomics, 57(6):943-955, 2014

Noto H, Muraki S. Effect of rear-wheel operation of a manual wheelchair on user's riding comfort and helper's strain while navigating steps. Biomedical Soft Computing and Human Sciences, 19(1):17-22, 2014

Xiong J, Fukumoto K, Muraki S. The effects of touch button size on touchscreen operability. Journal of Mechanics Engineering and Automation, 4(8):667-672, 2014

Rosyidi CN, Susmartini S, Purwaningrum L, Muraki S. Mismatch analysis of elementary school desk and chair key characteristics in Indonesia. Applied Mechanics and Materials 660:1057-1061, 2014

横田知明, 村木里志. 松葉杖のグリップ径が杖使用時における手部の負担に及ぼす影響. 人間工学, 50(5):286-293, 2014

北村奨悟, 村木里志, 大江田知子, 澤田秀幸, 田原将行, 植田能茂, 渡久地政志. パーキンソン病患者の椅子からの起立動作の特徴. 人間工学, 50(5):265-270, 2014

Loh PY, Muraki S. Effect of wrist deviation on median nerve cross-sectional area at proximal carpal tunnel level. Iranian Journal of Public Health, 43(3):180-185, 2014

Loh, PY, Muraki S. Effect of different wrist position on median nerve cross-sectional area at proximal carpal tunnel. Bridging Research and Good Practices towards Patient Welfare, Shih & Liang (Eds). CRC Press, 149-154, 2014

Loh PY, Muraki S. Effect of wrist angle on median nerve appearance at the proximal carpal tunnel. PLoS ONE, 10(2):e0117930, 2015 (doi:10.1371/journal.pone.0117930)

Loh PY, Nakashima H, Muraki S. Median nerve behavior at different wrist positions among older males. PeerJ 3:e928, 2015

村木里志, 岩切一幸. 特集: 分野別人間工学の現状と将来 (12) - 高齢者の人間工学研究の現状と将来 -. 人間工学 51(2):79-85, 2015

孫秀英, 村木里志. 消防用防護服着用時に実施する運動・バランス能力テストの有効性検討. デザントスポーツ科学 36:115-123, 2015

Purwaningrum L, Funatsu K, Xiong J, Rosyidi CN, Muraki S. Effect of furniture weight on carrying, lifting, and turning of chairs and desks among elementary school children. PLoS One, 10(6):e0128843, 2015 (doi:10.1371/journal.pone.0128843)

Rosyidi CN, Susmartini S, Pratama SA, Purwaningrum L, Muraki S. Mismatch analysis of elementary school desk and chair using Monte Carlo simulation. Applied Mechanics and Materials, 815:323-327, 2015 (doi:10.4028/www.scientific.net/AMM.815.323)

Xiong J, Muraki S. Effects of age, thumb length and screen size on thumb movement coverage on smartphone touchscreens. International Journal of Industrial Ergonomics, 53:140-148, 2015 (doi:10.1016/j.ergon.2015.11.004)

【学会発表】 < 国際発表 >

Loh PY, Muraki S. Effect of wrist deviation on median nerve cross-sectional area at proximal carpal tunnel level. International Conference on Environmental and Occupational Health, Malaysia, Apr 2014

Purwaningrum L, Muraki S. The observation of children's holding position to redesign elementary school chair for easy carrying and moving. 1st Asian Conference on Ergonomics and Design 2014, South Korea, May 2014

Xiong J, Muraki S, Fukumoto. The effects of touch button size to the operability of touchscreen. 1st Asian Conference on Ergonomics and Design 2014, South Korea, May 2014

Loh PY, Muraki S. Deformation of median nerve during active and passive wrist holding at proximal carpal tunnel. 1st Asian Conference on Ergonomics and Design 2014, South Korea, May 2014

Afiah IN, Nakashima H, Muraki S. Age-related changes in walking motion of Japanese females: Basic analysis of gait motion. The 1st Asian Conference on Ergonomics and Design 2014, South Korea, May 2014

Loh PY, Nakashima H, Muraki S. Effect of different wrist positions on median nerve cross-sectional area at proximal carpal tunnel. 4th International Conference on Healthcare Systems Ergonomics and Patient Safety, Taiwan, Jun 2014

Muraki S, Nakano S, Nakashima H. Effects of wearing slippers on walking locomotion on stairs in the elderly. 4th International Conference on Healthcare Systems Ergonomics and Patient Safety, Taiwan, Jun 2014

Muraki S, Ogawa D, Fukuda O. Change of ultrasound echo image texture in fatigued muscle. 5th International Conference on Applied Human Factors and Ergonomics (AHFE2014), Poland, Jul 2014

Loh PY, Muraki S. The comparison of median nerve circularity between active and passive wrist position at wrist region. The 21st Asian Conference on Occupational Health, Japan, Sep 2014

Afiah IN, Nakashima H, Muraki S. Characteristics of walking motion in elderly Japanese women. The Joint International Conference on APCHI-ERGOFUTURE-PEI-IAI (Ergofuture 2014), Indonesia, Oct 2014

Afiah IN, Nakashima H, Muraki S. Age-related changes in the walking motion of Japanese men: Basic analysis of gait. 3rd International Conference of South East Asian Network of Ergonomics Society, Singapore, Dec 2014

Muraki S, Nakashima H, Fukumoto K, Fukuda O. Circumference and muscle cross-sectional area of the thigh and calf in elderly Japanese people. 3rd International Conference of South East Asian Network of Ergonomics Society, Singapore, Dec 2014

Purwaningrum L, Xiong J, Funatsu K, Rosyidi CN, Susmartini S, Muraki S. Study of children's holding positions to redesign elementary school chairs for easy lifting and turning. 3rd International Conference of South East Asian Network of Ergonomics Society, Singapore, Dec 2014

Lourdes RHC, Satoh T, Nagasawa A, Ohkura M, Fukuzawa R, Muraki S. Awareness and prevention of repetitive strain syndromes of the hand and wrist during infant care. The ICM Asia Pacific Regional Conference 2015, Japan, Jul 2015

Muraki S, Takeda EJ. Effects of age and training on recruitment pattern of upper limb joint angles during finger pointing movements in three-dimensional space. 6th International Conference on Applied Human Factors and Ergonomic, USA, Jul 2015

Muraki S, Nakashima H, Fukumoto K, Fukuda O. Aging-related changes in walking motion among independent Japanese elderly. 6th International Conference on Applied Human Factors and Ergonomics, USA, Jul 2015

Loh PY, Nakashima H, Muraki S. The effect of wrist flexion and extension on median nerve at carpal tunnel among elderly Japanese men. 19th Triennial Congress of the International Ergonomics Association, Australia, Aug 2015

Muraki S, Nakashima H. Effects of wearing slippers on walking locomotion on stairs in female elderly. 19th Triennial Congress of the International Ergonomics Association, Australia, Aug 2015

Nasir N, Hayashi K, Loh PY, Muraki S. Effect of assistive force on the biceps and triceps brachii under isometric elbow flexion. International Conference on Movement, Health and Exercise (MoHE) 2015, Malaysia, Oct 2015

Muraki S, Nakashima H, Afiah IN, Fukumoto K, Fukuda O. Aging-related changes in gait and proportion of leg muscles among elderly Japanese subjects. 12th International Congress of Physiological Anthropology, Japan, Oct 2015

Nakashima H, Afiah IN, Loh PY, Fukumoto K, Fukuda O, Muraki S. The relationships between walking motion and the muscles cross-sectional area

in the lower limbs in the elderly. 12th International Congress of Physiological Anthropology, Japan, Oct 2015

<国内発表>

村木里志. 高齢者の生活と人間工学 (シンポジウム: 高齢・福祉社会における人間工学の役割と未来). 日本人間工学会第 55 回大会, 2014 年 6 月

北村奨悟, 村木里志, 大江田知子, 澤田秀幸, 田原 将行, 植田能茂, 渡久地政志. パーキンソン病患者の椅子からの起立動作の特徴. 日本人間工学会第 55 回大会, 2014 年 6 月

横田 知明, 村木里志. 松葉杖のグリップ径が杖使用時における手部の負担に及ぼす影響. 日本人間工学会第 55 回大会, 2014 年 6 月

小川大輔, 中島 弘貴, 福田 修, 村木里志. 一過性の筋運動による超音波エコー画像テクスチャの変化. 日本人間工学会第 55 回大会, 2014 年 6 月

甲木一樹, 中島弘貴, 村木里志. 運動錯覚を用いた新しい位置感覚評価法. 日本人間工学会九州・沖縄支部第 35 回大会, 2014 年 10 月

能登裕子, 村木里志. 車いす段差通過時の介助姿勢が走行動態と快適性に及ぼす影響. 第 27 回バイオメディカル・ファジィ・システム学会年次大会, 2014 年 11 月

新飼伸崇, 丸山翔平, 中島弘貴, Loh PY, 村木里志. 歩行における足指接地と離地タイミングの個人差の分類. 人類動態学会西日本地方会第 39 回大会, 2014 年 12 月

小川大輔, 中島弘貴, 福田修, 村木里志. 慢性的な筋愁訴と超音波テクスチャ画像との関連性. 人類動態学会西日本地方会第 39 回大会, 2014 年 12 月

張強, Lulu Purwaingrum, 横田知明, 村木里志. 成人と子供による一対対抗運動の特徴—肘関節屈曲運動の場合—. 人類動態学会西日本地方会第 39 回大会, 2014 年 12 月

中島弘貴, Irma Nur Afiah, Loh PY, 福元清剛, 福田 修, 村木里志. 下腿部の筋横断面積が歩容に与える影響について. 人類動態学会西日本地方会第 39 回大会, 2014 年 12 月

Loh PY, 中島弘貴, 村木里志. The use of ultrasound technique to understand the behavior of median nerve at proximal carpal tunnel at different wrist angle. 人類動態学会西日本地方会第 39 回大会, 2014 年 12 月

立野謙太, 横田知明, Loh PY, 村木里志. 若年者と高齢者の運動学習に伴う筋電図表出の違い. 平成 26 年度日本生理人類学会研究奨励発表会(九州地区), 2015 年 2 月

村木里志. 高齢者の生活・介護を助けるアシスト機器 (シンポジウム: 高齢者の生活および介護とロボット・アシスト機器). 日本人間工学会第 56 回大会, 2015 年 6 月

横田知明, 村木里志. スプリング内蔵型松葉杖が杖歩行時の上肢体幹筋活動および荷重安定性に及ぼす影響. 日本人間工学会第 56 回大会, 2015 年 6 月

中島弘貴, Irma Nur Afiah, Ping Yeap Loh, 村木里志. 高齢期に加齢変化する歩行指標の探索. 日本人間工学会第 56 回大会, 2015 年 6 月

Ping Yeap Loh, Hiroshi Nakashima, Satoshi Muraki. Median nerve displacement at passive wrist positions. 日本人間工学会第 56 回大会, 2015 年 6 月

能登裕子, 村木里志. 車いすのティッピングレバー形状が踏み込み足底圧と負担感に及ぼす影響. 日本人間工学会第 56 回大会, 2015 年 6 月

丸山翔平, Ping Yeap Loh, 中島弘貴, 村木里志, 古達浩志, 濱中伸介, 山田敦志, 池上功一. 歩幅増大が歩行フォームに及ぼす影響. 日本人間工学会第 56 回大会, 2015 年 6 月

熊 境鴻, 村木里志. The effects of hand size on thumb coverage on smartphone touchscreen. 日本人間工学会第 56 回大会, 2015 年 6 月

Ping Yeap Loh, Hiroki Nakashima, Satoshi Muraki. Relationship between wrist-finger posture and the deformation of median nerve. 第 50 回人類動態学会全国大会, 2015 年 6 月

中島弘貴, Irma Nur Afiah, Ping Yeap Loh, 福元清剛, 福田修, 村木里志. 自立歩行可能な高齢男性の下肢筋プロポーションと歩行動作との関係性. 第 50 回人類動態学会全国大会, 2015 年 6 月

甲木一輝, 中島弘喜, 村木里志. 筋紡錘への振動刺激を用いた新しい位

置感覚評価法の検証, LIFE2015, 2015 年 9 月

宇野直士, 村木里志. 異なる視覚条件が歩容に与える影響. 第 36 回医療体育研究会/第 19 回日本アダプテッド体育・スポーツ学会, 2015 年 11 月

宇野直士, 村木里志. 視覚障害シミュレーション下における歩行モーションの特徴. 人類動態学会西日本地方会第 40 回大会, 2015 年 12 月

中尾瑞歩, 村木里志. 軟膏を背中に塗る道具の形状についての検討. 人類動態学会西日本地方会第 40 回大会, 2015 年 12 月

【その他】

<受賞>

1st Asian Conference on Ergonomics and Design 2014, Best Paper Award (2014 年 5 月). Xiong J, Muraki S, Fukumoto K. The effects of touch button size to the operability of touchscreen.

International Journal of Biomedical Soft Computing and Human Sciences (Biomedical Fuzzy System Association), The Best Paper Award (2014 年 11 月). Noto H, Muraki S. Effect of rear-wheel operation of a manual wheelchair on user's riding comfort and helper's physical strain while navigating steps. International Journal of Biomedical Soft Computing and Human Sciences, 19(1):17-22, 2014

人類動態学会西日本地方会第 39 回大会 優秀発表賞 (2014 年 12 月). 新飼伸崇, 丸山翔平, 中島弘貴, Loh PY, 村木里志. 歩行における足指接地と離地タイミングの個人差の分類.

人類動態学会西日本地方会第 39 回大会 発表奨励賞 (2014 年 12 月). Loh PY, 中島弘貴, 村木里志. The use of ultrasound technique to understand the behavior of median nerve at proximal carpal tunnel at different wrist angle.

日本人間工学会研究奨励賞論文 (2015 年 6 月). 北村奨悟, 村木里志, 大江田知子, 澤田秀幸, 田原将行, 植田能茂, 渡久地政志. パーキンソン病患者の椅子からの起立動作の特徴. 人間工学, 50(5):265-270, 2014

日本人間工学会研究奨励賞論文 (2015 年 6 月). 横田知明, 村木里志. 松葉杖のグリップ径が杖使用時における手部の負担に及ぼす影響. 人間工学, 50(5):286-293, 2014

日本人間工学会第 56 回大会 優秀研究発表奨励賞 (2015 年 6 月). 中島弘貴, Irma Nur Afiah, Ping Yeap Loh, 村木里志. 高齢期に加齢変化する歩行指標の探索.

12th International Congress of Physiological Anthropology (ICPA), Best Post Award (2015 年 10 月). Nakashima H, Afiah IN, Loh PY, Fukumoto K, Fukuda O, Muraki S. The relationships between walking motion and the muscles cross-sectional area in the lower limbs in the elderly.

人類動態学会西日本地方会第 40 回大会 最優秀発表賞 (2015 年 12 月). 中尾瑞歩, 村木里志. 軟膏を背中に塗る道具の形状についての検討.

<特許, デザイン, 作品, 新聞・雑誌等への掲載>

受験勉強からひろがる世界 ダイガクリカ, 受験 My vision (2014 年 5 月号), ベネッセ

おもしろ講義, 受験 My vision (2015 年 7 月号), ベネッセ

ビジネス創造交流会「福祉・健康・介護向け製品をワンランクアップするためには～人間工学による開発支援～」, 西日本シティ銀行・九州大学, 2016 年 1 月

大草孝介

【論文】

Okusa K, Kamakura T. A Study on Gait Parameter Estimation Stability for the Frontal View Gait Video Data based on Simulation. IAENG Transactions on Engineering Sciences, CRC Press, 421-428, 2014. (doi: 10.1201/b16763-46)

Okusa K, Kamakura T. Statistical Registration of Frontal View Gait Silhouette with Application to Gait Analysis. Proceedings of the International Conference of Computational Statistics (COMPSTAT 2014), 411-418, 2014.

大草孝介, 阿部興, 乾秀平, 五十嵐悠貴, 岩井佑二郎, 小林千鶴, 辻村朋大, 福元啓祐, 呂佳興, 吉江勇人, 鎌倉稔成. アクセス遷移の傾向解析に基づくページ分類とそこから得られる知見について. 計算機統計学, 27(2):81-93, 2014.

Okusa K, Kamakura T. Indoor Location Estimation based on the Statistical Spatial Modeling and Radial Distributions. Proceedings of the World Congress on Engineering and Computer Science 2015 (WCECS 2015), 835-840, 2015.

Okusa K, Kamakura T. Indoor Location Estimation based on the RSS method using Radial Log-normal Distribution. Proceedings of the 16th IEEE International Symposium on Computational Intelligence and Informatics (CINTI2015), 29-34, 2015.

大草孝介, 阿部興, 内藤貴也, 山口直人, 加田拓磨, 黒田淑恵, 佐藤のぞみ, 日高明日香, 森健人, 鎌倉稔成. 検索条件の共起性を用いた物件推薦アルゴリズムに関する研究. 計算機統計学, 28(2): 147-154, 2015.

【学会発表】 < 国際発表 >

Sakata T, Okusa K, Sakamoto H, Yoshinaga Y, Ohnishi T. Estimation of running distance of top tennis players from video images and its applications. The 7th International Conference of the ERCIM WG on Computational and Methodological Statistics (ERCIM 2014), 104, Italy, Dec 2014.

Isaka W, Okusa K, Kamakura T. Frontal view gait analysis using weighted center of gait silhouette based on the scale registration. The 7th International Conference of the ERCIM WG on Computational and Methodological Statistics (ERCIM 2014), 104, Italy, Dec 2014.

Akimoto Y, Okusa K, Kamakura T. Statistical analysis of human respiration based on complex signals with Doppler radar. The 7th International Conference of the ERCIM WG on Computational and Methodological Statistics (ERCIM 2014), 105, Italy, Dec 2014.

Sakumura T, Okusa K, Kamakura T. Functional data analysis of running data by 3D-motion capture. The 7th International Conference of the ERCIM WG on Computational and Methodological Statistics (ERCIM 2014), 105, Italy, Dec 2014.

Sakata T, Okusa K, Sumi T, Miyazaki M. Gröbner basis calculation over the finite field GF(p) by R-program and its application to tensor rank determination problems. Joint Meeting of IASC-ABE, Brazil, Aug 2015.

< 国内発表 >

秋元良友, 大草孝介, 鎌倉稔成. ドップラーセンサを用いた信号平面上の分布に基づく統計的解析. 日本計算機統計学会第 28 回シンポジウム, 2014 年 11 月.

森健人, 秋元良友, 加田拓磨, 桑原洋祐, 吉田敦, 露崎博之, 大草孝介, 鎌倉稔成. 個人の購買特性と閲覧回数を考慮した最適レコメンデーションシステムの設計. 日本計算機統計学会第 28 回シンポジウム, 2014 年 11 月

永沼暁, 大草孝介. ドップラーセンサを用いた転倒動作の統計的モデリング. 科研費シンポジウム「空間データと災害の統計モデル」, 2015 年 12 月.

< 受賞 >

Certificate of Merit for the World Congress on Engineering and Computer Science 2015 (WCECS 2015).

受賞対象論文 Okusa K, Kamakura T. Indoor Location Estimation based on the Statistical Spatial Modeling and Radial Distributions. Proceedings of the World Congress on Engineering and Computer Science 2015 (WCECS 2015), 835-840, 2015.

能登裕子

【論文】

Noto H, Muraki S. Effect of rear-wheel operation of a manual wheelchair on user's riding comfort and helper's physical strain while navigating steps, International Journal of Biomedical Soft Computing and Human Sciences, Vol.19(1): 17.-22, 2014

【学会発表】

< 国内発表 >

能登裕子, 村木里志. 車いす段差通過時の介助姿勢が走行動態と快適性に及ぼす影響. 第 27 回バイオメディカルファジィシステム学会, 2014 年 11 月

松浦弘幸, 中野正博, 神谷直樹, 石川耕介, 山中真, 根本哲也, 能登裕子, 久保田正美, 行正徹, 玉川雅章. 人体の外傷に関する基礎的研究報告. 第 27 回バイオメディカルファジィシステム学会, 2014 年 11 月

能登裕子, 村木里志. 車いすのティッピングレバー形状が踏み込み足底圧と負担感に及ぼす影響. 日本人間工学会第 56 回大会, 2015 年 6 月

平川善大, 大池美也子, 能登裕子. 看護基礎教育におけるウェブディスカッションの有効性 - 尺度得点の前後比較からの考察 -. 日本看護教育学会第 20 回九州・沖縄地方会学術集会, 2015 年 11 月

【その他】

< 受賞 >

International Journal of Biomedical Soft Computing and Human Sciences, The Best Paper Award (Nov, 2014. Biomedical Fuzzy System Association). Noto H, Muraki S. Effect of rear-wheel operation of a manual wheelchair on user's riding comfort and helper's physical strain while navigating steps.

樋口重和

【著書】

樋口重和. 眼 (pp.94-95), 概日リズム (pp.184-186), 生体リズム (pp.187-188). 人間科学の百科事典 (日本生理人類学会編), 丸善出版, 2015

樋口重和. 夜の光の影響は子どもの方が大きかった! (pp.35-37) 子どものからだと心・連絡会議, 子どものからだと心白書 2015, ブックハウス・エイチディ, 2015

【原著論文】

Lee SI, Hida A, Kitamura S, Mishima K, Higuchi S. Association between the melanopsin gene polymorphism OPN4*1le394Thr and sleep/wake timing in Japanese university students. Journal of Physiological Anthropology. 33:9, 2014 (doi: 10.1186/1880-6805-33-9)

Kitamura S, Hida A, Aritake S, Higuchi S, Enomoto M, Kato M, Vetter C, Roenneberg T, Mishima K. Validity of the Japanese version of the Munich ChronoType Questionnaire. Chronobiology International. 31(7): 845-850, 2014

Motomura Y, Kitamura S, Oba K, Terasawa Y, Enomoto M, Katayose Y, Hida A, Moriguchi Y, Higuchi S, Mishima K. Sleepiness induced by sleep-debt enhanced amygdala activity for subliminal signals of fear. BMC Neuroscience. 19, 15(1), 97, 2014 (doi: 10.1186/1471-2202-15-97)

Hayashida K, Higuchi S, Kajiwa J, Lee SI, Kai K, Setsu K, Hattori F. Nighttime sleep is correlated with effectiveness of inpatient rehabilitation for hemiplegia patients after stroke. Sleep and Biological Rhythms, 12 (3), 220-223, 2014

Higuchi S, Nagafuchi Y, Lee SI, Harada T. Influence of light at night on melatonin suppression in children. The Journal of Clinical Endocrinology & Metabolism. 99(9):3298-3303, 2014

財津康輔, 林田健太, 梶原治朗, 松隈浩之, 樋口重和. 起立 - 着席運動を支援するシリアスゲームの生理・心理的影響の評価. 体力科学 63(5), 469-473, 2014

樋口重和, 李相逸. 光のサーカディアンリズムとメラトニン分泌への作用の個人差, 照明学会誌, 99(1), 20-24, 2015

Zaitsu K, Nishimura Y, Matsuguma H, Higuchi S, Association Between Extraversion and Exercise Performance Among Elderly Persons Receiving a Videogame Intervention. Games for Health Journal. 4(5): 375-380, 2015

Späti J, Aritake S, Meyer AH, Kitamura S, Hida A, Higuchi S, Moriguchi Y, Mishima K. Modeling circadian and sleep-homeostatic effects on short-term interval timing. Frontiers in Integrative Neuroscience. 9: 15, 2015 (doi: 10.3389/fnint.2015.00015)

Ogawa M, Seno T, Matsumori K, Higuchi S. Twenty-Hour Sleep Deprivation Does Not Affect Perceived Vection Strength. Journal of Behavioral and Brain Science. 5 (12), 550-560, 2015

Kaneshi Y, Ohta H, Morioka K, Hayasaka I, Uzuki Y, Akimoto T, Moriichi A, Nakagawa M, Oishi Y, Wakamatsu H, Honma N, Suma H, Sakashita R, Tsujimura S, Higuchi S, Shimokawara M, Cho K, Minakami H. Influence of light exposure at nighttime on sleep development and body growth of preterm infants. Scientific Reports. 15; 6:21680, 2016 (doi: 10.1038/srep21680)

Higuchi S, Lee SI, Kozaki T, Harada T, Tanaka I. Late circadian phase in adults and children is correlated with use of high color temperature light at home at night. Chronobiology International. 33(4): 448-452, 2016

【学会発表】

< 国際発表 >

Akiyama T, Higuchi S, Oota H, A genetic polymorphism of the PER2 gene associates with physiological polytypisms for light sensitivity in humans. 国際人類学民族科学連合 (IUAES2014), Japan, May 2014

Lee SI, Higuchi S, Association between genetic polymorphism of melanopsin photoreceptor and sleep/wake timing. 国際人類学民族科学連合 (IUAES2014), Japan, May 2014

Lee SI, Higuchi S, A missense I394T variant in human melanopsin gene is associated with non-image forming responses, including pupillary light reflex and sleep/wake timing. The 1st Asian Conference on Ergonomics and Design

(ACED), South Korea, May 2014

Higuchi S, Sieyoshi K, Isoda K, Hisanaga I, Orlic S, Kim YK. Brain activity during observation of another person's hand action with a tangible user interface. The 1st Asian Conference on Ergonomics and Design (ACED), South Korea, May 2014

Kim Y, Tomihara K, Akashima K, Higuchi S, EEG responses to group action-related stimuli. The 1st Asian Conference on Ergonomics and Design (ACED), South Korea, May 2014

Higuchi S, Lee SI, Nagafuchi Y, Harada T, Comparison of light-induced melatonin suppression in children and adults. SLTBR 26th Annual Meeting, Austria, Jun 2014

Lee SI, Hida A, Higuchi S, The I394T single nucleotide polymorphism of human melatonin gene might be associated with spectral sensitivity of melanopsin. SLTBR 26th Annual Meeting, Austria, Jun 2014

Higuchi S, Lee SI, Nagafuchi Y, Harada K, Association between circadian phase and light before bedtime in Japanese children and their parents. 19th Congress of the European Anthropological Association, Russia, Aug 2014

Motomura Y, Oba K, Terasawa Y, Nozaki K, Ayabe N, Moriguchi Y, Kamei Y, Higuchi S, Mishima K, Structural and functional changes in the mesolimbic system in primary insomnia patients: an fMRI and DTI study. 22nd Congress of The European Sleep Research Society, Estonia, Sep 2014

Higuchi S, Effects of light before bed time on melatonin suppression and circadian phase in children. 光生物・光化学応用研究フォーラム, China, Oct 2014

Nishi T, Matsumori K, Lee SI, Kozaki T, Miura N, Higuchi S, Association between melatonin suppression and circadian phase delay by light exposure during night shift work with and without nap. JSC International Symposium, Japan, Nov 2014

Ochiai S, Matsumori K, Lee SI, Tarumi C, Uozu N, Yasuo S, Higuchi S, Effects of L-serine intake on light-induced circadian phase advance in human. JSC International Symposium, Japan, Nov 2014

Lee SI, Higuchi S, Association between I394T single nucleotide polymorphism of human melanopsin gene and spectral sensitivity of melanopsin. JSC International Symposium, Japan, Nov 2014

Higuchi S, Ota H, Phenotypic variations in non-visual effects of light associated with melanopsin and clock gene polymorphism in human. International Symposium on Human Adaptation to Environment and Whole-body Coordination, Japan, Mar 2015

Ikeda Y, Nishimura Y, Higuchi S, Relation between positive emotional contagion and mirror system. The 12th International Congress of Physiological Anthropology, Japan, Oct 2015

Higuchi S, Effects of light at night on melatonin suppression and circadian phase in children. The 12th International Congress of Physiological Anthropology, Japan, Oct 2015

Zhang Y, Lin Y, Qiu J, Lee SI, Yasukouchi A, Higuchi S, Comparison of sleep and chronotypes of Japanese and Chinese university students. The 12th International Congress of Physiological Anthropology, Japan, Oct 2015

Lee SI, Matsumori L, Higuchi S, A proposal to simplify the estimation of characteristic spectral responses of melanopsin to light wavelengths, The 12th International Congress of Physiological Anthropology, Japan, Oct 2015

Nishimura Y, Suematsu A, Ikeda Y, Isoda K, Hisanaga I, Kim Y, Higuchi S, Effects of imitating experience on brain activities while observing images with implied motions, The 12th International Congress of Physiological Anthropology, Japan, Oct 2015

Higuchi S. Light and circadian rhythms. The 11th Joint Workshop on Machine Perception and Robotics (MPR2015), Japan, Nov 2015

<国内発表>
樋口重和. ヒトの共感・模倣と脳内ミラーシステム, 日本文化人類学会, 2014年5月

樋口重和. メラノプシン遺伝子多型と光感受性および睡眠の関係. 日本睡眠学会第39回定期学術集会, 2014年7月

李相逸, 肥田昌子, 北村真吾, 三島和夫, 樋口重和. ヒトのメラノプシン遺伝子の一塩基多型と睡眠習慣・就寝時刻と覚醒時刻について. 日本睡眠学会第39回定期学術集会, 2014年7月

元村祐貴, 大場健太郎, 寺澤悠理, 綾部直子, 野崎健太郎, 肥田昌子, 守口善也, 亀井雄一, 樋口重和, 三島和夫. 慢性不眠症患者の脳構造: Voxel-based Morphometryを用いた検討. 日本睡眠学会第39回定期学術集会, 2014年7月

松森孝平, 西剛史, 樋口重和. 模倣的夜勤時の仮眠が記憶に及ぼす影響. 日本睡眠学会第39回定期学術集会, 2014年7月

落合将太郎, 原田和樹, 樋口重和. 複数の生理指標を用いた色光の生体影響評価の重要性. 日本睡眠学会第39回定期学術集会, 2014年7月

石田祥悟, 平原楓, 村山克哉, 西村悠貴, KIM YEONKYU, 松隈浩之, 樋口重和. リハビリ観察時の高齢者の脳内ミラーシステムの活動. 第71回日本生理人類学会, 2014年11月

瀬海亮, 末松愛理, 磯田和生, 久永一郎, 樋口重和. 運動印象を伴う彫刻画観察時の脳活動と模倣体験の影響. 第71回日本生理人類学会, 2014年11月

槇得達也, 池田悠稀, 樋口重和. 他者の存在がアフォーダンス知覚に及ぼす影響—事象関連同期を用いた研究—. 第71回日本生理人類学会, 2014年11月

張亦馳, 西剛史, 落合将太郎, 松森孝平, 李相逸, 小崎智照, 安河内朗, 樋口重和. 家庭で概日リズム位相と夜の照明のメラトニン分泌抑制の評価. 第71回日本生理人類学会, 2014年11月

樋口重和. 生理学的なヒトの概日リズムの評価方法. 第21回日本時間生物学学会学術大会, 2014年11月

北村真吾, 肥田昌子, 樋口重和, 亀井雄一, 三島和夫. 内的脱同調状態は概日リズム睡眠障害自由継続型患者における気分低下を惹起する. 第21回日本時間生物学学会学術大会, 2014年11月

西村悠貴, 末松愛理, 磯田和生, 樋口重和. 模倣体験が運動印象を伴う画像観察時の脳活動に与える影響. 日本生理心理学会第33回大会, 2015年5月

池田悠稀, 樋口重和. 他者と物体の位置関係の違いが物体の知覚に及ぼす影響: 事象関連同期を用いた検討. 日本生理心理学会第33回大会, 2015年5月

末松愛理, 瀬海亮, 西村悠貴, 池田悠稀, 磯田和生, 久永一郎, 樋口重和. 模倣体験が運動印象を含む画像観察時の事象関連電位に及ぼす影響. 日本生理人類学会第72回大会, 2015年5月

平原楓, 石田祥悟, 村山克哉, 西村悠貴, KIM YEONKYU, 松隈浩之, 樋口重和. リハビリ支援用のゲーム映像の違いが脳活動に及ぼす影響. 日本生理人類学会第72回大会, 2015年5月

樋口重和. 自然環境への適応と人工環境への不適応～光と生体リズムの観点から～. 日本生理人類学会第72回大会, 2015年5月

樋口重和. 現代社会の光がもたらす social jetlag への影響. 日本睡眠学会第40回定期学術集会, 2015年7月

樋口重和. 夜の光と子どもの概日リズム・メラトニン. 第64回東北公衆衛生学会, 2015年7月

樋口重和. 子どもの概日システムの光感受性. 日本視覚学会2016年冬季大会, 2016年1月

李相逸, 落合将太郎, 樋口重和. 色光に対する非視覚的作用と心理的作用の関係. 日本視覚学会2016年冬季大会, 2016年1月

【その他】

<受賞>

日本生理人類学会第70回大会 優秀発表賞 (2014年6月). 秋山辰穂, 勝村啓史, 中込滋樹, 城圭一郎, 副島英伸, 藤本一真, 木村亮介, 石田肇, 埴原恒彦, 樋口重和, 太田博樹. メラトニン抑制に関する生理的多型と時計遺伝子 PERIOD2 多型との関係及びその適応的意義の考察

17th World Congress of Psychophysiology(IOP2014), Best Young Presentation Award (Sep. 2014). Motomura Y, Kitamura Y, Nakazaki K, Oba K, Katsunuma R, Katayose Y, Hida A, Moriguchi Y, Higuchi S, Mishima K. Recovery from potential sleep debt via sleep extension may improve emotion regulation.

日本生理人類学会優秀研究賞 (2015年5月). 樋口重和. 日本生理人類学会

2015年度日本生理人類学会夏期セミナー・研究奨励発表会 優秀発表賞 (2015年9月). 西村悠貴, 池田悠稀, 末松愛理, 筋田梨愛, 樋口重和.

子どもにおけるミラーシステム活動の特性の検討.

12th International Congress of Physiological Anthropology (ICPA), Best Poster Award (Oct 2015). Nishimura Y, Suematsu A, Ikeda Y, Isoda K, Hisanaga I, Kim Y, Higuchi S. Effects of Imitating Experience on Brain Activities while Observing Images with Implied Motions.

キム ヨンキュ

【著書】

キム ヨンキュ. 特殊感覚の法則 (pp275-276). 人間科学の百科事典 (日本生理人類学会編), 丸善出版, 2015.01.

【論文】

Park MS, Kim SH, Sohn S, Kim GJ, Kim YK, Sohn JH. Brain activation during processing of angry facial expressions in patients with alcohol dependency. Journal of Physiological Anthropology. 1;34:6, 2015 (doi: 10.1186/s40101-015-0046-6)

Hayashida K, Higuchi S, Kajiwar J, Lee SI, Kai K, Setsu K, Hattori F. Nighttime sleep is correlated with effectiveness of inpatient rehabilitation for hemiplegia patients after stroke. Sleep and Biological Rhythms. 12 (3), 220-223, 2014 (corresponding author)

Motomura Y, Takeshita A, Egashira Y, Nishimura T, Kim YK, Watanuki S. Inter-individual relationships in empathic traits and feedback-related fronto-central brain activity: an event-related potential study. Journal of Physiological Anthropology. 24;34:14, 2015 (doi: 10.1186/s40101-015-0053-7)

Motomura Y, Takeshita A, Egashira Y, Nishimura T, Kim YK, Watanuki S. Interaction between valence of empathy and familiarity: is it difficult to empathize with the positive events of a stranger? Journal of Physiological Anthropology. 22;34:13, 2015 (doi: 10.1186/s40101-015-0049-3)

【学会発表】

< 国際発表 >

Kim YK, Tomihara H, Akashima K, Higuchi S. EEG responses to group action-related stimuli. ACED2014, Korea, May 2014

Higuchi S, Sueyoshi K, Isoda K, Hisanaga I, Orlie S, Kim YK. Brain activity during observation of another person's hand action with a tangible user interface. The 1st Asian Conference on Ergonomics and Design (ACED), Korea, May 2014

Hayashi S, Ikeda Y, Nishimura Y, Higuchi S, Kim YK. Event-related brain responses to beautiful walking posture. The 12th International Congress of Physiological and Anthropology, Japan, Oct 2015

Hayashi S, Kim YK. Mother's emotional inhibition during a go/nogo task-an ERP study. The International Conference on Emotion and Sensibility 2015, Korea, Nov 2015

< 国内発表 >

赤島健太, 林小百合, 和田宏子, 松井恵子, 山田洋史, KIM YEONKYU. 冬季寒冷曝露時における香りの生理心理反応. 日本生理人類学会第 70 回大会, 2014 年 6 月

林小百合, 和田宏子, 樋口 重和, KIM YEONKYU. 子どもを守る母親の脳活動. 日本生理人類学会第 70 回大会, 2014 年 6 月

KIM YEONKYU, 赤島健太, 羽淵啓太, 樋口 重和. ジェスチャー観察時の μ 波抑制における模倣学習の影響. 日本生理人類学会第 70 回大会, 2014 年 6 月

石田祥悟, 平原楓, 村山克哉, 西村悠貴, 松隈浩之, KIM YEONKYU. 樋口重和, リハビリ訓練観察時の高齢者のミラーシステム活動. 日本生理人類学会第 71 回大会, 2014 年 11 月

平原楓, 石田祥悟, 村山克哉, 西村悠貴, KIM YEONKYU, 樋口重和. リハビリ支援用のゲーム画面と脳活動の関係について. 日本生理人類学会発表奨励会, 2015 年 2 月

村山克哉, 石田祥悟, 平原楓, 樋口重和, KIM YEONKYU. 共感性の高い集団行動観察時の μ 波抑制において年齢差・性差が及ぼす影響. 日本生理人類学会発表奨励会, 2015 年 2 月

小松将太郎, 村山克哉, 樋口重和, KIM YEONKYU. 観察者の見る角度の違いが μ 波抑制に及ぼす影響. 日本生理人類学会発表奨励会, 2015 年 2 月

林小百合, 樋口重和, KIM YEONKYU. 子育てにより刺激への感受性が高まった母親の脳活動一事象関連電位による検討. 日本生理心理学第 33 回大会. 2015 年 5 月

【その他】

西部ガス株式会社社内報平成 28 年 3 月号. 「匂いで癒しを得る - アロマ効果」.

< 受賞 >

The International Conference on Emotion and Sensibility 2015 (ICES), Best Presentation Awards (Nov 2015). Hayashi S, Kim YK. Mother's emotional inhibition during a go/nogo task-an ERP study. The International Conference on Emotion and Sensibility

松隈浩之

【論文】

Matsuguma H, Hattori F, Kajiwar J. Development of a rehabilitation game to support stand-up exercise and its usability in care facilities. The International Society for Gerontechnology, 144-145, 2014

財津康輔, 林田健太, 梶原治朗, 松隈浩之, 樋口重和. 起立 - 着席運動を支援するシリアスゲームの生理・心理的影響の評価. 体力科学, 63(5): 469-473, 2014

【学会発表】

< 国際発表 >

Matsuguma H, Hattori F, Kajiwar J. Development of a rehabilitation game to support stand-up exercise and its usability in care facilities. ISG2014, Taiwan, Jun 2014

Matsuguma H, Hattori F. Game for stand-up rehabilitation training -How We Stand Up to Our Super Aging Society-. Games for Health Europe 2014, Oct 2014

< 国内発表 >

松隈浩之, シリアスゲームプロジェクトによるリハビリ・ヘルスケア用ゲームの展開, CEDEC2014, 2014 年 9 月

Matsuguma H, ブレイフルデザインへの挑戦 - シリアスゲームプロジェクトの取り組み, dotFes2014 福岡, 2014 年 12 月

Matsuguma H, 伸ばせ健康寿命! -Healthy Aging with Game-, Smart Mobility Asia2015, 2015 年 1 月

【その他】

< 受賞 >

九州経済産業局長賞, 九州ヘルスケア産業推進協議会 (2015 年 7 月) 「リハビリ・ヘルスケアゲームの開発」

ビジネスベストセクション入賞, 健康科学ビジネス創造フォーラム (2016 年 3 月) 「高齢者向けリハビリ・ヘルスケアゲームの研究開発」

< 作品 >

Matsuguma H, Fujioka S, Nakajima A, Kaneko K, 株式会社メディカ出版, 特定医療法人 順和 長尾病院, リハビリウム 起立くん, 2013 年 3 月

Matsuguma H, ロコモでバラミンゴ, 2014 年 8 月

Matsuguma H, 特定医療法人 順和 長尾病院, たたけ! パンパン職人, 2015 年 8 月

< メディア掲載 >

2016.01, 読売新聞夕刊, 「ゲームで介護予防」としてロコモ運動サークルが掲載.

2015.12, RKB 毎日放送「今日感テレビ」, 認知予防の特集でロコモ運動サークルの様子.

2015.03, KBC 朝日放送「アサデス」, 認知予防の特集でロコモ運動サークルの様子.

2015.03, TBS ラジオ「森本毅郎・スタンバイ!」, 高齢者向けリハビリ・ヘルスケア向けゲームについて.

2015.02, 中国新聞, 産経新聞, 東京新聞, 西日本新聞, 他 8 紙, 共同通信にロコモ運動サークルの取り組みを取材.

2014.09, 京都ラジオカフェ・FM 高松「くらもといたるのいたらナイト」, シリアスゲームプロジェクトの活動について.

2014.05, テレビ西日本「TNC スーパーニュース」, ロコモに注意! の特集「ロコモでパラミング」が紹介された。

2014.06, FBS「NEWS5 ちゃん」, 介護老人保健施設「ふる里」(糸島)で「リハビリウム起立くん」が利用されている様子が紹介された。

2014.04, TVQ 九州放送「ぐっ! ジョブ」, 高齢者が楽しく、安心して暮らせる町福岡の特集の中で開発ゲームが紹介された。

平松千尋

【著書】

平松千尋. サルの果実さがし: 二色型と三色型の比較から迫る色覚の適応的意義 (pp.115-150). 視覚の認知生態学 (種生物学会編), 文一総合出版, 2014

【論文】

Melin AD, Hiramatsu C, Parr NA, Matsushita Y, Kawamura S, Fedigan LM. The behavioral ecology of color vision: considering fruit conspicuity, detection distance and dietary importance. *International Journal of Primatology*, 35(1): 258-287, 2014

Matsumoto Y, Hiramatsu C, Matsushita Y, Ozawa N, Ashino R, Nakata M, Kasagi S, Di Fiore A, Schaffner CM, Aureli F, Melin AD, Kawamura S. Evolutionary renovation of L/M opsin polymorphism confers a fruit discrimination advantage to ateline New World monkeys. *Molecular Ecology*, 23: 1799-1812, 2014

Ogawa M, Hiramatsu C, Seno T. Surface qualities have little effect on vection strength. *Frontiers in Psychology*, 5: 610, 2014 (doi: 10.3389/fpsyg.2014.00610)

MacLean ML, Hare B, Nunn CL, Addessi E, Amici F, Anderson RC, Aureli F, Baker JM, Bania AE, Barnard AM, Boogert NJ, Brannon EM, Bray EE, Bray J, Brent LJN, Burkart JM, Call J, Cantlon JF, Cheke LG, Clayton NS, Delgado MM, DiVincenti LJ, Fujita K, Herrmann E, Hiramatsu C, Jacobs LF, Jordan KE, Laude JR, Leimgruber KL, Messer EJE, de A. Moura AC, Ostojić L, Picard A, Platt ML, Plotnik JM, Range F, Reader SM, Reddy RB, Sandel AA, Santos LR, Schumann K, Seed, AM, Sewall KB, Shaw RC, Slocumbe KE, Su Y, Takimoto A, Tan J, Tao R, van Schaik CP, Virányi Z, Visalberghi E, Wade JC, Watanabe A, Widness J, Young JK, Zentall TR, Zhao Y. The evolution of self-control. *Proceedings of the National Academy of Science U S A*, 111:2140-2148, 2014

Hiramatsu C, Fujita K. Visual categorization of surface qualities of materials by capuchin monkeys and humans. *Vision Research*, 115: 71-82, 2015

Melin AD, Kline DW, Hiramatsu C, Caro T. Zebra stripes through the eyes of their predators, zebras, and humans. *PLOS ONE*, 11 (3): e0145679, 2016

【学会発表等】

< 国際学会 >

Hiramatsu C, Ogawa M, Seno T. Do surface qualities of moving objects influence vection?, 37th European Conference on Visual Perception, Serbia, Aug 2014

< 国内学会 >

平松千尋. 色覚の進化と多様性ーカラーユニバーサルデザインのための基礎知識. 日本色彩学会第 45 回全国大会, 2014 年 5 月 (招待講演)

平松千尋. 霊長類の色覚の進化と多様性. 映像情報メディア学会ヒューマンインフォメーション研究会, 2014 年 11 月 (招待講演)

平松千尋. 視知覚の種間比較研究: 素材質感知覚や顔色知覚、種間比較の難しさについて. 第 10 回犬山比較社会認知シンポジウム, 2015 年 3 月

平松千尋, 藤田和生. 素材質感知覚の種間比較. 第 48 回知覚コロキウム, 2015 年 3 月

野田健太, 妹尾武治, 平松千尋. ゲーム映像視聴中の VR 酔いを静止点によって低減する試み. 聴覚研究会 (H)・VR 心理学研究委員会 (VR) 共催研究会, 2016 年 2 月

緒方信乃介, 妹尾武治, 平松千尋. 音楽と画像の間にあるイメージの共通性ー音楽に合うカバージャケットー. 聴覚研究会 (H)・VR 心理学研究委員会 (VR) 共催研究会, 2016 年 2 月

橋彌和秀

【著書】

橋彌和秀. こころというセオリー: あるいは, Theory of Mind ふたたび (pp.77-83). 動物と出会う II 心と社会の生成 (木村大治編), ナカニシヤ出版, 2015

橋彌和秀. まなざしの進化と発達 (pp.27-38). 心の理論ー第 2 世代の研究へ (子安増生 郷式徹 編), 新曜社, 2016

【論文】

Murakami T & Hashiya K. Development of reference assignment in children: a direct comparison to the performance of cognitive shift. *Front.Psychol.* 5: 523, 2014 (doi:10.3389/fpsyg)

Meng X & Hashiya K. Pointing behavior in infants reflects the communication partner's attentional and knowledge states: a possible case of spontaneous informing. *PLoS ONE*, 9(9): e107579, 2014 (doi:10.1371/journal.pone.0107579)

Norimatsu H, Blin R, Hashiya K, Sorsana Ch, Kobayashi H. Understanding of others' knowledge in French and Japanese children: a comparative study with a disambiguation task on 16-38-month-olds. *Infant Behavior and Development*. 37(4). pp.632-643, 2014 (doi:10.1016/j.infbeh)

【学会発表】

< 国際発表 >

Meng X & Hashiya K. 15-month-old infants spontaneously inform the "New one" for the other. 2014 International Conference on Infant Studies, Berlin, Jul 2014.

Norimatsu H, Blin R, Hashiya K, Sorsana C, Kobayashi H. Understanding of other's knowledge in French and Japanese 16-38 month-olds: a new task of disambiguation in speech acts. International Conference on Infant Studies, Berlin, Jul 2014

Meng X & Hashiya K. Pointing behavior in infants reflects the communication partners attentional and knowledge states: a possible case of spontaneous informing. Budapest CEU Conference on Cognitive Development, Budapest, Jan 2015

Meng X & Hashiya K. Pointing behavior in infants reflects the communication partners attentional and knowledge states: a possible case of spontaneous informing. 9th Annual Conference on the Evolutionary Behavioral Sciences, USA, Apr 2015

< 国内発表 >

橋彌和秀. "Theory of Mind" は「心の理論」か? . 幼児言語発達研究会第 1 回セミナー, 2014 年 5 月 (話題提供)

橋彌和秀. 共感ー「こころの理論」ー"Theory of Mind". コミュニケーションの自然誌研究, 2014 年 5 月

Meng X, Hashiya K. Informing the other about a "new" object based on shared experience. 日本赤ちゃん学会第 14 回学術集会, 2014 年 6 月

宇土裕亮, 長江侑紀, 浦田恭子, 橋彌和秀. 「要求に沿わない結果」に対する乳児の意図帰属に行方者間の関係が及ぼす影響. 日本赤ちゃん学会第 14 回学術集会, 2014 年 6 月

橋彌和秀. まなざしの進化論. 杵島地区医療セミナー (白石保養院), 2014 年 7 月

橋彌和秀. 自他を混同するシステムとしての共感: 一人称複数形 "We" 使用の発達を手掛かりとして. 日本人間行動進化学会第 7 回大会, 2014 年 11 月

田尻加奈, 孟憲巍, 橋彌和秀. Facial mimicry in response to facial expressions in infancy. 日本人間行動進化学会第 7 回大会, 2014 年 11 月

岸本励季, 橋彌和秀. 「実はいい人」が好き?ー幼児期における他者の属性評価と目撃状況との相互作用ー. 新学術領域研究「共感性の進化・神経基盤」第 2 回領域会議, 2015 年 1 月

橋彌和秀. 共感というこころのシステムへのアプローチ. 平成 26 年度日本生理人類学会研究奨励発表会 (九州地区), 2015 年 2 月

橋彌和秀. 自主ラウンドテーブル: 実験心理学ワークショップ 2015. ラウンドテーブル企画・ファシリテーター. 第 26 回発達心理学会, 2015 年 3 月

孟憲巍, 橋彌和秀. Pointing behavior in infants reflects the Communication Partner's attentional and knowledge States: a possible case of spontaneous informing. 第 26 回発達心理学会, 2015 年 3 月

村上太郎, 橋彌和秀. 発達障害を有する幼児における曖昧な指示対象の同定 指示対象付与, 誤信念課題との関連からみる語用論的コミュニケーション. 第 26 回発達心理学会, 2015 年 3 月

田尻加奈, 孟憲巍, 橋彌和秀. Facial mimicry in response to dynamic facial

expressions in infancy. 第 26 回発達心理学会, 2015 年 3 月

橋彌和秀. 自主シンボジウム: 共感のなりたち・同情のなりたち 共感性の構成論的基盤を探る. 第 26 回発達心理学会 2015 年 3 月 (企画・話題提供者)

丸田弥音, 前山航暉, 橋彌和秀. 他者の喜び／怒り／悲しみ表情に対する 0-1 歳児の自発的表情模倣. 日本赤ちゃん学会第 15 回学術集会, 2015 年 6 月

宇土裕亮, 橋彌和秀. 幼児における意図推論の内容に行為者間の関係性が及ぼす影響. 日本赤ちゃん学会第 15 回学術集会, 2015 年 6 月

橋彌和秀. Developmental and evolutionary origins of empathetic systems. シンポジウム「ゲイト・キーパーとしての TOM (こころの理論)」, 2015 年 7 月

孟憲巍, 村上太郎, 橋彌和秀. 幼児における指示対象付与能力の言語間比較 - 中国語話者幼児は「これは?」をどのように解釈するか? -. 日本心理学会 79 回大会, 2015 年 9 月

宇土裕亮, 橋彌和秀. 幼児における意図推論の内容に参与者間の関係性が及ぼす影響. 日本心理学会第 79 回大会, 2015 年 9 月

宇土裕亮, 丸田弥音, 橋彌和秀. 視覚モダリティが関わる意図推論における感嘆詞の影響. ヒューマンコミュニケーション基礎研究会 (HCS) 研究会, 2016 年 1 月

孟憲巍, 橋彌和秀. 0-1 歳児における他者間のインタラクションに関する期待. 新学術領域研究「共感生の進化・神経基盤」第 3 回領域会議, 2016 年 1 月

宇土裕亮, 橋彌和秀. エージェント相互作用場面における意図帰属に間投詞が及ぼす影響. 新学術領域研究「共感生の進化・神経基盤」第 3 回領域会議, 2016 年 1 月

綿貫茂喜

【論文】

Nishimura T, Seno T, Motoi M, Watanuki S. Illusory Self-Motion (Vection) May Be Inhibited by Hypobaric Hypoxia. Aviation, Space, and Environmental Medicine, 85:4, 2014

江頭優佳, 本井碧, 崔多美, 松本吏子, 高倉潤也, 西村貴孝, 綿貫茂喜. 触覚刺激がオノマトペ音声の認知過程に及ぼす影響. 日本生理人類学会誌, 19(2)69-75, 2014

Choi D, Nishimura T, Motoi M, Egashira Y, Matsumoto R, Watanuki S. Effect of empathy trait on attention to various facial expressions: evidence from N170 and late positive potential (LPP). Journal of Physiological Anthropology, 33:18, 2014

Motoi M, Egashira Y, Nishimura T, Choi D, Matsumoto R, Watanuki S. Time window for cognitive activity involved in emotional processing. Journal of Physiological Anthropology, 33:21, 2014

Nishimura T, Watanuki S. Relationship between mitochondrial haplogroup and seasonal changes of physiological responses to cold. Journal of Physiological Anthropology, 33:27, 2014

崔多美, 松本吏子, 江頭優佳, 本井碧, 西村貴孝, 綿貫茂喜. 起床時コルチゾール反応 (CAR) と性格特性との関連性: 日本人男性を対象として. 日本生理人類学会誌, 19(4)247-251, 2014

Takakura J, Nishimura T, Choi D, Egashira Y, Watanuki S. Nonthermal sensory input and altered human thermoregulation: effects of visual information depicting hot or cold environments. International Journal of Biometeorology, 59:1453-1460, 2015

Choi D, Egashira Y, Takakura J, Motoi M, Nishimura T, Watanuki S. Gender difference in N170 elicited under oddball task. Journal of Physiological Anthropology, 34:7, 2015

Sohn J, Kim H, Sohn S, Seok J, Choi D, Watanuki S. Effect of emotional arousal on inter-temporal decision-making: an fMRI study. Journal of Physiological Anthropology, 34:8, 2015

Nishimura T, Motoi M, Egashira Y, Choi D, Aoyagi K, Watanuki S. Seasonal variation of non-shivering thermogenesis (NST) during mild cold exposure. Journal of Physiological Anthropology, 34:11, 2015

Motomura Y, Takeshita A, Egashira Y, Nishimura T, Kim Y, Watanuki S. Interaction between valence of empathy and familiarity: is it difficult to

empathize with the positive events of a stranger? Journal of Physiological Anthropology, 34:13, 2015

Motomura Y, Takeshita A, Egashira Y, Nishimura T, Kim Y, Watanuki S. Inter-individual relationships in empathic traits and feedback-related fronto-central brain activity: an event-related potential study. Journal of Physiological Anthropology, 34:14, 2015

Egashira Y, Choi D, Motoi M, Nishimura T, Watanuki S. Differences in event-related potential responses to Japanese onomatopoeias and common words. Psychology, 6: 1653-1660, 2015

Choi D, Ota S, Watanuki S. Does cigarette smoking relieve stress? Evidence from the event-related potential (ERP). International Journal of Psychophysiology, 98: 470-476, 2015

【学会発表】

< 国際発表 >

Choi D, Nishimura T, Motoi M, Egashira Y, Matsumoto R, Watanuki S. Effect of empathy trait on attention to faces: Evidence from N170. The 1st Asian Conference on Ergonomics and Design 2014, Korea, May 2014

Motoi M, Egashira Y, Nishimura T, Choi D, Matsumoto R, Watanuki S. Relationship between cognitive activity involved in emotional processing and personality, 17th World Congress of Psychophysiology, Japan, Sep 2014

Egashira Y, Motoi M, Choi D, Takakura J, Nishimura T, Watanuki S. Effect of a high-humidity environment on the event-related potential response to speech perception. International Symposium on Human Adaptation to Environment and Whole-body Coordination, Japan, May 2015

Choi D, Minote N, Motoi M, Watanuki S. Association between oxytocin receptor gene polymorphism and personality traits. International Symposium on Human Adaptation to Environment and Whole-body Coordination, Japan, May 2015

Choi D, Minote N, Watanuki S. Association between oxytocin receptor gene polymorphism and event-related potential response to emotional pictures. 5th Cambridge Neuroscience Symposium - Imaging the Nervous System, UK, Sep 2015

Kishida F, Choi D, Sekiya T, Minote N, Watanuki S. Association between empathy trait and attention to detection of gaze direction. The 12th International Congress of Physiological Anthropology, Japan, Oct 2015

Minote N, Choi D, Sekiya T, Kishida F, Watanuki S. Association between oxytocin receptor gene polymorphism and ERP responses to reappraisal. The 12th International Congress of Physiological Anthropology, Japan, Oct 2015

Sekiya T, Choi D, Minote N, Kishida F, Watanuki S. Associations between 5-HTTLPR polymorphism and brain activity evoked by reappraisal. The 12th International Congress of Physiological Anthropology, Japan, Oct 2015

Egashira Y, Choi D, Motoi M, Nishimura T, Watanuki S. The difference in cognitive load between onomatopoeias and common words. The 12th International Congress of Physiological Anthropology, Japan, Oct 2015

Motoi M, Egashira Y, Minote N, Watanuki S. The relationship between 5-HTTLPR gene polymorphism and event-related potentials during affective picture processing. The 12th International Congress of Physiological Anthropology, Japan, Oct 2015

Choi D, Minote N, Sekiya T, Kishida F, Watanuki S. Oxytocin receptor genetic variation modulates brain activity and personality. The 12th International Congress of Physiological Anthropology, Japan, Oct 2015

Choi D, Minote N, Kishida F, Watanuki S. Oxytocin receptor gene polymorphism and brain activity. The International Conference on Emotion and Sensibility, Korea, Nov 2015

< 国内発表 >

崔多美, 江頭優佳, 本井碧, 松本吏子, 西村貴孝, 綿貫茂喜. 顔表情に対する注意反応の男女差 - N170 と LPP を指標として -. 日本生理人類学会第 70 回大会, 2014 年 6 月

江頭優佳, 本井碧, 崔多美, 松本吏子, 西村貴孝, 綿貫茂喜. 湿度環境の変化がオノマトペの認知過程に及ぼす影響. 日本生理人類学会第 70 回大会, 2014 年 6 月

崔多美, 江頭優佳, 本井碧, 西村貴孝, 綿貫茂喜. 顔に対する早期反応と後期反応の関係: ERP 研究. 日本生理人類学会第 71 回大会, 2014 年 11 月

本井碧, 江頭優佳, 養手なつ美, 崔多美, 西村貴孝, 綿貫茂喜. 聴覚刺激

に対する事象関連電位とセロトニントランスポーター遺伝子多型の関連. 日本生理人類学会第 71 回大会, 2014 年 11 月

江頭優佳, 本井碧, 崔多美, 西村貴孝, 綿貫茂喜. オノマトペの認知過程に湿度環境が及ぼす影響 - 事象関連電位を用いた検討 -. 日本生理人類学会第 71 回大会, 2014 年 11 月

樺田正樹, 江頭優佳, 本井碧, 崔多美, 西村貴孝, 綿貫茂喜. 言語刺激による ERP と遺伝子多型の関係. 日本生理人類学会第 71 回大会, 2014 年 11 月

関谷崇寛, 江頭優佳, 崔多美, 本井碧, 西村貴孝, 綿貫茂喜. 閉所環境が事象関連電位に与える影響. 日本生理人類学会第 71 回大会, 2014 年 11 月

太田将太郎, 崔多美, 関谷崇寛, 樺田正樹, 綿貫茂喜. 喫煙が生理心理反応に及ぼす影響. 日本生理人類学会第 71 回大会, 2014 年 11 月

本井碧, 養手なつ美, 江頭優佳, 崔多美, 西村貴孝, 綿貫茂喜. 画像刺激に対する事象関連電位とセロトニントランスポーター遺伝子多型との関連. 日本生理人類学会第 72 回大会, 2015 年 5 月

江頭優佳, 本井碧, 崔多美, 西村貴孝, 綿貫茂喜. 湿度環境の違いが聴覚 P300 に及ぼす影響. 日本生理人類学会第 72 回大会, 2015 年 5 月

太田将太郎, 崔多美, 綿貫茂喜. 喫煙が生理心理反応に及ぼす影響 - 不快情動付与時の反応 -. 日本生理人類学会第 72 回大会, 2015 年 5 月

城屋敷謙, 江頭優佳, 本井碧, 崔多美, 西村貴孝, 綿貫茂喜. 湿度環境がヒトの生理・心理反応に与える影響. 日本生理人類学会第 72 回大会, 2015 年 5 月

養手なつ美, 崔多美, 本井碧, 江頭優佳, 綿貫茂喜. 快・不快刺激に対する ERP 反応のオキシトシン受容体遺伝子多型による違い. 日本生理人類学会第 72 回大会, 2015 年 5 月

元村祐貴, 竹下晃, 江頭優佳, 西村貴孝, キムヨンキュ, 綿貫茂喜. 正または負の事象への共感に相手との親密性が与える影響. 日本生理人類学会第 72 回大会, 2015 年 5 月

西村貴孝, 勝村啓史, 本井碧, 太田博樹, 綿貫茂喜. 寒冷適応に関わる UCPI 遺伝子型間のヒトにおける熱産生反応の違い. 第 69 回日本人類学会大会, 2015 年 10 月

Choi D, Sekiya T, Minote N, Kishida E, Watanuki S. Oxytocin receptor gene polymorphism affects processing of gaze direction: an event-related potential (ERP) study. 脳と心のメカニズム第 16 回冬のワークショップ, 2016 年 1 月

【その他】
<受賞>
日本生理人類学会第 70 回大会発表奨励賞 (2014 年 6 月). 崔多美, 江頭優佳, 本井碧, 松本吏子, 西村貴孝, 綿貫茂喜. 顔表情に対する注意反応の男女差 -N170 と LPP を指標として -

第 69 回日本人類学会大会若手会員大会発表賞 (2015 年 10 月). 西村貴孝, 勝村啓史, 本井碧, 太田博樹, 綿貫茂喜. 寒冷適応に関わる UCPI 遺伝子型間のヒトにおける熱産生反応の違い

尾方義人

【著書】
尾方義人, すわるをかんがえる - Design Thinking01~10, 住まいと電化, 日本工業出版, 2015.03~12

尾方義人, 日本の住まいと家具 - 日本の空間における生活家具の在り方, 住まいと電化, 日本工業出版, 2015.12

【論文】
尾方義人, レジリエンスデザイン試論, 23(1), 59-63, 芸術工学研究, 2015

Liu Jin, Yoshito Ogata, The Application of Speed Warning on Highway Using Anti-Dazzle Panel Based on Persistence of Vision Effect, Mechanical Components and Control Engineering, 668-669, 1462-1465, 2014

尾方義人, 劉瑾, 芸術工学を背景とする基幹教育に関する研究, 11(1), 118-123, 基幹教育紀要, 2015

【学会発表】
<国内発表>
山下大智, 尾方義人, 工業性に基づく八女の伝統産業の「型」の研究, 日本デザイン学会第五支部, 2015 年 10 月

賀佳, 尾方義人, 家具とジェンダーに関する研究, 日本デザイン学会第五支部, 2015 年 10 月

李東海, 尾方義人, 交差点における歩行者の行動分析, 日本デザイン学会第五支部, 2015 年 10 月 24 日

金澤尚樹, 尾方義人, 盲導犬ユーザーのエクスペリエンスデザイン, 日本デザイン学会第五支部, 2015 年 10 月 24 日

尾方義人, 藤智亮, 能登裕子, 松尾晃成, 末村祐子, 被災地におけるレジリエンスデザイン研究, 日本デザイン学会第五支部, 2015 年 10 月 24 日

劉瑾, 藤田徹郎, 光岡 真里, 藤智亮, 尾方義人「認知症予防活動」理解のための行為分析, 日本デザイン学会第五支部, 2015 年 10 月

【その他】
<受賞>
受賞 2015 福岡デザインアワード

受賞 2014 アジアデジタルアート

<特許>
特許出願番号 J P 1 4 0 8 1

<メディア掲載>
2015.02.20, 西日本新聞「子供の健康 まず足から」

2016.02, 西日本新聞, 糸島市市営船のデザイン.

2016.02, 毎日新聞, 糸島市市営船のデザイン.

2016.01, 毎日新聞, 福岡産業デザイン賞作品の紹介.

2015.10, KBC 九州朝日放送, 福岡産業デザイン賞作品の紹介.

2015.09, 佐賀新聞, 社会連携事業の実施の紹介.

2015.08, 佐賀新聞, 社会連携事業の紹介.

2015.01, 西日本新聞, 研究内容の紹介 水質改善ロボットの提案.

<作品>
糸島市営渡船「ひめしま」デザイン, 2016.02

企業キャラクターデザイン・商品パッケージデザイン, 2015.12

アイスリット テープディスペンサー, 2015.12

藤智亮

【論文】
藤智亮, 立石憲治. 揺動刺激と音刺激が児に及ぼす鎮静効果 - 月齢 2 ヶ月児を対象として -. 日本生理人類学会誌, 19(3): 129-136, 2014

藤智亮. 育児支援のための電動ベビーベッドの開発 (揺動刺激が児におよぼす鎮静効果). 日本設計工学会誌 設計工学, 49(9): 492-497, 2014

【学会発表】
<国内発表>
藤智亮. 少子化・核家族社会における育児を支援するための電動ベビーベッドの研究開発. 九州大学 COI 拠点フォーラム, 2014 年 3 月

劉瑾, 尾方義人, 藤智亮, 藤田徹郎, 光岡真里. 「認知症予防活動」理解のための行為分析. 平成 27 年度日本デザイン学会第 5 支部研究発表会, 2015 年 10 月

尾方義人, 藤智亮, 能登裕子, 松尾晃成, 末村祐子. 被災地におけるレジリエンスデザイン研究. 平成 27 年度日本デザイン学会第 5 支部研究発表会, 2015 年 10 月

山田クリス孝介

【著書】
山田クリス孝介 (2015) ストレスホルモン (p560-561), 人間科学の百科事典 (日本生理人類学会編), 丸善出版, 2015

【論文】
Yamada KC, Inoue S, Sakamoto Y. An effective support system of emergency medical services with tablet computers. JMIR mHealth uHealth 3(1): e23, 2015

Koami H, Isa T, Ishimine T, Kameyama S, Matsumura T, Yamada KC, Sakamoto Y. Risk factors for bowel necrosis in patients with hepatic portal venous gas. Surg Today 45: 156-161, 2015

Koami H, Sakamoto Y, Ohta M, Goto A, Narumi S, Imahase H, Yahata M, Miike T, Iwamura T, Yamada KC, Inoue S
Can the rotational thromboelastometry predict the septic disseminated intravascular coagulation? Blood Coagul Fibrinolysis. 26(7): 778-83, 2015

渡辺健太郎, 藤満幸子, 原田由美子, 山田クリス孝介, 須永剛司, 小早川真衣子, 新野佑樹, 阪本雄一郎, 西村拓一, 本村陽一. 看護現場における業務経験の表現・共有支援システムの開発. 情報処理学会論文誌. 56(1): 137-147, 2015

中村菜々子, 井澤修平, 山田クリス孝介. ストレス・マネジメント行動の阻害要因: ストレスの過小評価に着目して. 行動医学研究. 21(2): 69-75, 2015

【学会発表】
< 国際発表 >

Yamada K, Fujimitsu S, Harada Y, Watanabe K, Sunaga T, Kobayakawa M, Sakamoto Y, Nishimura T. A co-design project for a nursing information system. The 19th Triennial Congress of the IEA, Melbourne, Australia, 9-14 August 2015

Yamada KC, Sone Y, Crews DE, Kusano Y, Aoyagi K, Maeda T, Iwamoto A. Association between Allostatic Load and Activities of Daily Living in Older Japanese. The 12th International Congress of Physiological Anthropology, Chiba, Japan, October 27-30, 2015

Yamada K, Watanabe K, Hope T, Sunaga T, Kobayakawa M, Nishimura T, Sakamoto Y, Motomura Y. Co-design Project for a nursing information system at a University Hospital in Japan. HAT-MASH 2015 (Healthy Aging Tech mashup service, data and people) (as part of JSAI-isAI2015, supported by Society for Serviceology), Kanagawa, Japan, November 16-17th, 2015

< 国内発表 >

阪本雄一郎, 山田クリス孝介. 救急医療における ICT 利用. 自動車技術会 2015 年春季大会 学術講演会, 2015 年 5 月

山田クリス孝介, 藤満幸子, 原田由美子, 渡辺健太郎, 須永剛司, 小早川真衣子, 阪本雄一郎, 本村陽一, 西村拓一. モノ・コトづくり支援のための現場参加型研究: 佐賀大学医学部附属病院における事例. 2015 年度 人工知能学会全国大会, 2015 年 5 月

山田クリス孝介, 井澤修平, 菅谷渚, 木村健太, 小川奈美子, 城月健太郎, 長野祐一郎. 急性ストレスに対する認知的評価が心臓血管およびコルチゾール反応に与える影響. 第 33 回 日本生理心理学会大会, 2015 年 5 月

井澤修平, 菅谷渚, 木村健太, 小川奈美子, 山田クリス孝介, 城月健太郎, 長野祐一郎. 主観的幸福感と急性ストレス場面におけるコルチゾール反応. 第 33 回 日本生理心理学会大会, 2015 年 5 月

山田クリス孝介, 井澤修平, 中村菜々子. ストレスの過小評価の信念と疾病既往歴および睡眠との関連. 日本心理学会第 79 回大会, 2015 年 9 月

山田クリス孝介, 岩村高志, 永嶋太, 藤田亮, 小網博之, 三池徹, 八幡真由子, 今長谷尚史, 後藤明子, 鳴海翔悟, 太田美穂, 井上聡, 阪本雄一郎. 佐賀県における循環器系疾患による救急搬送の状況. 第 19 回日本救急医学会九州地方会, 2015 年 5 月

今長谷尚史, 阪本雄一郎, 岩村高志, 太田美穂, 後藤明子, 八幡真由子, 小網博之, 三池徹, 藤田亮, 永嶋太, 山田クリス孝介, 井上聡. 集中治療室からプレホスピタルケアを考える: 佐賀大学医学部附属病院 EICU 立ち上げにおける課題からみえたもの. 第 19 回日本救急医学会九州地方会, 2015 年 5 月

山田クリス孝介, 阪本雄一郎. 佐賀県における交通事故に関する調査と研究会の設立. 第 43 回日本救急医学会, 2015 年 10 月

外部研究資金一覧

環境適応研究部門

競争的資金

・2013年度～2017年度, 基盤研究 (A), 代表, 「ゲノム情報・生理的多型性・行動からみた光環境における遺伝的及び可塑的適応性の評価」(安河内朗)

・2014年度～2016年度, 基盤研究 (B), 代表, 「寒冷曝露時の熱産生反応からみた生理的多型性の検討」(前田享史)

・2015年度～2016年度, 挑戦的萌芽研究, 代表, 「ヒト褐色脂肪活性の簡易評価手法の検討」(前田享史)

・2013年度～2014年度, 挑戦的萌芽研究, 代表, 「異なる調光方式のLED照明によるメラトニン分泌抑制作用」(小崎智照)

・2014年度～2015年度, 新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO), 分担, 「ヒューマンファクターを考慮した省エネ照明システムの開発」(小崎智照)

・2015年度～2018年度, 基盤研究 (B), 代表, 「メラトニン分泌抑制を軽減するLED照明の点滅特性」(小崎智照)

・2014年度～2015年度, 九州大学 P & P, Kyushu University Interdisciplinary programs in Education and Projects in Research development, 代表, 「3次元分析による古人骨上顎歯槽骨形態の時代変化の研究」“Secular change in alveolar protrusion in human remains in Japan using 3 dimensional analysis.”(瀬口典子)

アクティブライフ部門

競争的資金

・2015年度～2016年度, 挑戦的萌芽研究, 代表, 「スピーチを用いた聴性脳幹反応の補聴器フィッティングへの応用に関する研究」(白石君男)

・2015年度～2017年度, 挑戦的萌芽研究, 代表, 「動作アシストに対する筋のアダプタビリティに関する基礎的研究」(村木里志)

・2014年度～2016年度, 基盤研究 (B), 代表, 「下肢筋プロポーションと歩行モーションの加齢変化とその関連性」(村木里志)

・2016年度～2018年度, 挑戦的萌芽研究, 代表, 「高齢者の特性と家庭内転倒リスクを考慮した衣服型ウェアラブル端末の開発と検証」(能登裕子)

・2013年度～2015年度, 若手研究 (B), 代表, 「介助負担と乗り心地を考慮した標準型車いすへの改善に関する検討」(能登裕子)

・2014年度～2016年度, 若手研究 (B), 代表, 「多次元低周波ストリームデータのパターン認識法の構築」(大草孝介)

ヒューマニティ部門

競争的資金

・2012年度～2015年度, 基盤研究 (B), 代表, 「子どもの高い光感受性と概日リズムの夜型化・成熟に関する研究」(樋口重和)

・2015年度～2018年度, 基盤研究 (A), 代表, 「ヒトのメラノプシン遺伝子多型と生理機能：機能的潜在性の発現と環境適応能」(樋口重和)

・2013年度～2015年度, 基盤研究 (A), 代表, 「高齢者向けロコモ対策用ゲームの開発を通じたゲームデザイン研究」(松隈浩之)

・2015年度～2016年度, 若手研究 (B), 代表, 「遺伝的な色覚の多様性が感性の個人差に与える影響」(平松

千尋)

・2014年度～2016年度, 基盤研究 (B), 代表, 「わたしたち」の起源: 自己概念の拡張とその心理基盤の発達に関する多角的検討」(橋弥和秀)

企業との共同研究

・2009年度～2014年度, 大日本印刷株式会社, 「美術館展示に関する感性・脳科学的アプローチに関する研究」(樋口重和)

・2013年度～2016年度, ファンケル株式会社, 「概日時計に及ぼすL-セリンの影響に関する研究」(樋口重和)

レジリエンスデザイン部門

競争的資金

・2014年度～2016年度, 基盤研究 (A), 代表, 「日本人の寒冷適応能を構成する遺伝的要因と生理的要因の検証」(綿貫茂喜)

・2015年度～2016年度, 挑戦的萌芽研究, 代表, 「セロトニントランスポーター遺伝子のSアレルを有する日本人の生理人類学的特徴」(綿貫茂喜)

・2015年度～2016年度, 外国人特別研究員奨励費, 代表, 「他者と情動を共有する際の脳活動とオキシトシン受容体遺伝子多型との関係に関する研究」(綿貫茂喜)

・2015年度～2018年度, 基盤研究 (B), 分担, 「子育て支援プロダクト創出のための科学的エビデンスの構築」(綿貫茂喜)

・2015年度～2018年度, 基盤研究 (B), 代表, 「子育て支援プロダクト創出のための科学的エビデンスの構築」(藤智亮)

・2013年度～2015年度, 挑戦的萌芽研究, 代表, 「物理的サポートに基づく生理評価を伴う育児環境デザイン」(藤智亮)

・2015年度～2017年度, 基盤研究 (B), 代表, 「地域救急医療の質の向上に資する科学的証拠の構築に関する研究」(山田クリス孝介)

・2012年度～2014年度, 基盤研究 (C), 代表, 「地域救急医療連携への影響要因の解明と支援技術の運用を通じた評価に関する研究」(山田クリス孝介)

・2015年度～2017年度, 基盤研究 (C), 分担, 「大規模医療情報基盤を利用した敗血症の治療に関する医療経済学的分析と評価」(山田クリス孝介)

・2013年度～2015年度, 基盤研究 (C), 分担, 「長崎県の都市部における恒常性維持負荷度を指標とした生活習慣と全身的協関の相関研究」(山田クリス孝介)

・2013年度～2015年度, 若手研究 (B), 代表, 「集団間紛争における賞賛と排斥の集団内力学」(縄田健悟)

・2014年度～2016年度, 基盤研究 (B), 分担, 「成員間の「暗黙の協調」を促進し全体的連動を創成するチームマネジメントの研究」(縄田健悟)

・2015年度～2016年度, 九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト, 「被災地におけるレジリエンスデザイン研究」(尾方義人, 藤智亮, 能登裕子)

企業との共同研究

・2015年度～2016年度, 株式会社サムライト, 「認知機能のレジリエンスに関する基礎的研究」(尾方義人, 藤智亮)

・2015年度～2016年度, 株式会社アーバンゲット, 「レジリエンストランスポーション商品の開発研究」(尾方義人, 藤智亮)

応用生理人類学研究センター年報（2014-2015 年度）

発行日：2016 年 10 月 1 日

編集発行：九州大学大学院芸術工学研究院附属 応用生理人類学研究センター

〒 815-8540 福岡市南区塩原 4-9-1

九州大学大橋キャンパス 応用生理人類学研究センター事務局

E-Mail： parc@design.kyushu-u.ac.jp

URL： <http://www.parc.design.kyushu-u.ac.jp/>



■■■ 応用生理人類学研究センター
PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGY RESEARCH CENTER

〒815-8540 福岡市南区塩原 4-9-1 九州大学大学院芸術工学研究院
<http://www.parc.design.kyushu-u.ac.jp/>